氷見市埋蔵文化財調査報告第61冊

鞍　川　E　遺　跡　Ⅱ

市道鞍川霊峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（２）

２０１２年７月

氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財調査報告第61冊

鞍　川　E　遺　跡　Ⅱ

市道鞍川霊峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（２）

２０１２年７月

氷見市教育委員会

例　　言

1　本書は、平成23年度に実施した富山県氷見市鞍川地内に所在する鞍川Ｅ遺跡第二次調査の発掘調査報告書である。

2　調査は、市道鞍川霊峰線バイパス整備事業に先立ち、氷見市建設農林部建設課の依頼を受けて、氷見市教育委員会が実施した。

3　発掘調査は、氷見市教育委員会が主体となり、北陸航測株式会社が担当した。

4　調査面積は361㎡である。

5　調査期間は、平成24年３月５日より平成24年４月20日（実働20日）である。

6　調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課（～平成23年度：生涯学習課）に置いた。事務担当者は次のとおりである。

平成23年度　課長：藪田栄治、課長補佐：荒井市郎、副主幹：大野　究、主任学芸員：廣瀬直樹

平成24年度　課長：坂本研資、副主幹：大野　究、文化総括担当：天坂　正、主任学芸員：廣瀬直樹

7　発掘調査担当者は次のとおりである。

監　督　員	氷見市教育委員会　生涯学習・スポーツ課	廣瀬直樹
管理技術者	北陸航測株式会社	沼田　淳
現場代理人	北陸航測株式会社	朝田　要
調　査　員	北陸航測株式会社	橋　日奈子　片山博通

8　整理作業は、遺物洗浄・注記等基礎的な作業は調査と並行して実施し、遺構図面作成、遺物実測、報告書作成・編集は調査終了後、平成24年７月まで実施した。

9　本書の執筆は、第１章・第２章第１節を廣瀬が、その他を朝田・橋・片山が担当し、編集は朝田が行った。

10　出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課が保管している。

11　遺跡の略号は「ＫＲＫＥ－2012」とした。

12　調査参加者は次のとおりである。

発掘作業員：上野恵美子・上野節子・後山健作・遠藤幸雄・蔵　利雄・清水不二雄・下野孝雄・中川一美・藤井久征・紅谷清三・向　修誠・屋敷幸子・山下　巽

（以上、氷見市シルバー人材センター）

発掘補助員：荒井美子（北陸航測株式会社）

整理作業員：荒井美子・西村玲子・米倉和子（北陸航測株式会社）

13　調査・本書作成にあたり、下記の機関から多大なご協力を得た。記して感謝申し上げる。

氷見市シルバー人材センター・氷見市建設農林部建設課　　（50音順・敬称略）

目　　次

第１章：遺跡の環境 …… 1
　第１節：地理的環境 …… 1
　第２節：周辺の遺跡 …… 1
第２章：調査の概要 …… 2
　第１節：調査に至る経緯 …… 2
　第２節：調査の経過 …… 3
第３章：調査の成果 …… 4
　第１節：基本層序 …… 4
　第２節：遺構 …… 4
　第３節：遺物 …… 7
第４章：まとめ …… 9
引用・参考文献 …… 11
報告書抄録
奥付

表　目　次

第１表　周辺遺跡対応表
第２表　遺物出土遺構一覧表
第３表　遺物観察表

図　目　次

第１図　周辺の遺跡
第２図　鞍川地区の既往調査位置図
第３図　鞍川Ｅ遺跡　調査位置・グリッド配置図
第４図　基本層序模式図
第５図　調査区（ＫＲＫＥ－２０１１、２０１２）合成図
第６図　調査区全体・遺構配置図
第７図　調査区壁面土層断面図（東壁）
第８図　遺構実測図（１）
第９図　遺構実測図（２）
第10図　遺構実測図（３）
第11図　遺物実測図（１）
第12図　遺物実測図（２）
第13図　遺物実測図（３）

写　真　図　版　目　次

図版１　１．調査区遠景（東から）　２．調査区全景（垂直）
図版２　１．遺構検出状況（南から）　２．ＳＤ01－C土層断面（南から）
　　３～５．包含層遺物出土状況（３．東から　４．西から　５．東から）
図版３　１～３．調査区東壁土層断面（北端から南端／西から）４．ＳＫ19断面（東から）
　　５．ＳＫ19完掘（北から）６・７．遺物出土状況（ＳＰ37：西から　ＳＰ22：北から）
　　８．作業風景（ＳＤ01遺構掘削）
図版４　遺物写真１
図版５　遺物写真２
図版６　遺物写真３

第１章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡１町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230 km²、人口は約５万２千人である。市域は、北・西・南の三方が標高300～500ｍの丘陵に取り囲まれ、東側約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。

鞍川Ｅ遺跡が所在する鞍川地区は、氷見市のほぼ中央を流れる上庄川下流南岸に位置する。河畔に平野が開け、背後には丘陵山地が連なる。上庄川は、氷見市南西端の大釜山（501.7m）に発し、約22kmで富山湾に注ぐ河川であり、氷見市では長さ・流域面積ともに最大である。

鞍川Ｅ遺跡は、上庄川下流右岸の平野南端、標高約７ｍに立地し、背後には丘陵が迫る。平成21年度に氷見市教育委員会が実施した分布調査で発見された遺跡である。鞍川では昭和30年代に土地改良が実施され、整然とした水田が広がっている。査対象地の北側には、能越自動車道氷見北ＩＣのアクセス道路として整備された一般国道415号（通称鞍川バイパス）が通る。また西側は、平成23年度に開業した金沢医科大学氷見市民病院の敷地となる。

第２節　周辺の遺跡

鞍川Ｅ遺跡が所在する鞍川地区の周辺では、平成14年度以降、一般国道415号（鞍川バイパス）の道路改良や、金沢医科大学氷見市民病院の建設等に伴い、断続的に発掘調査を実施している。また、現在の鞍川地区の周辺は、室町・戦国時代には、国人土豪鞍河氏が本貫地としていた場所とされる。以下、近年鞍川地区で本発掘調査を実施した遺跡について、概要を記しておく。

鞍川中Ａ遺跡は、上庄川の支流、紅谷川と野手川の合流地点南側に立地する。平成14年度の調査では、近世に周辺が開墾される以前の湿地帯と川跡を確認し、古代から近世の遺物が出土した。

鞍川中Ｂ遺跡は、上庄川下流域に存在が推定される加納潟（仮称）に流れ込む流路のほとりの低地に営まれた遺跡である。平成15・16年度の調査では、弥生時代中期の川跡から大量の土器が出土したほか、中世から近世の溜池状遺構が見つかっている。また平成21年度に遺跡南東で実施した調査では、13～14世紀の遺構・遺物を確認している。

鞍川Ｄ遺跡は、鞍川Ｅ遺跡の北西側に立地する。平成15年度の調査では、井戸跡、流路、溝、土坑などの遺構が検出された。遺物としては珠洲焼や土師器皿、青磁、白磁、山茶碗など13世紀前半を主体に、12世紀後半から13世紀代いっぱいの遺物が出土している。建物跡等は見つかっていないが、いずれも13世紀前半の構築と考えられる井戸跡が３基検出されており、おそらく調査区の外側に向けて平安時代末から鎌倉時代始め頃に営まれた集落が広がっているものと推測される。

平成23年度に実施した鞍川Ｅ遺跡の第１次調査では、調査区中央を流れる流路跡から、弥生土器を中心に古代から中世の遺物が出土した。出土した弥生土器は、弥生時代終末期の白江式期のものである。そのほか、柱穴や溝などの遺構が検出された。また、流路からは、８世紀末～９世紀代と推測される瓦塔破片が出土した。

第２章　調査の概要

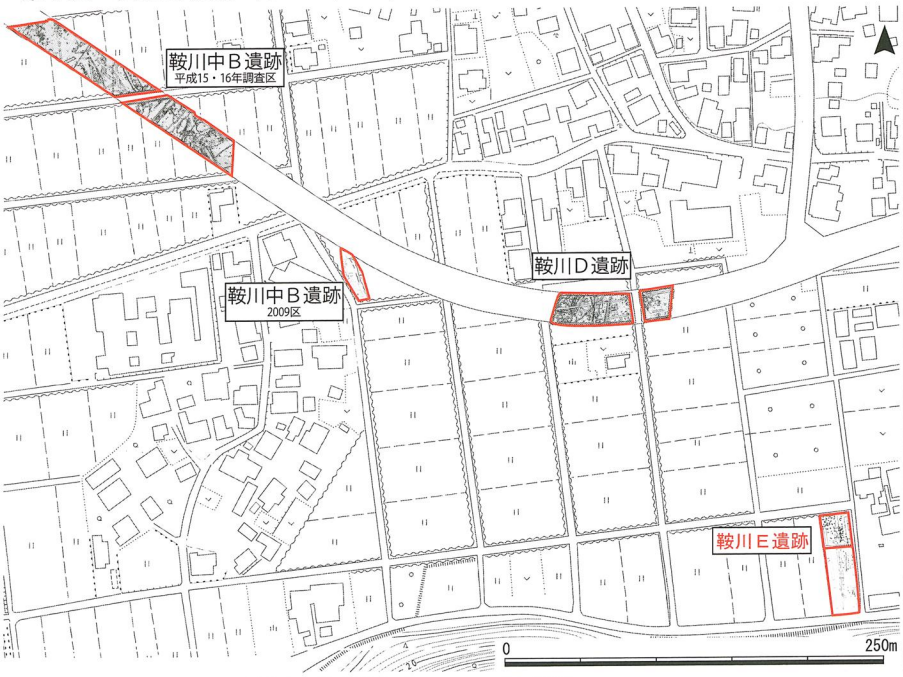
第１節　調査に至る経緯

調査の原因となった市道鞍川霊峰線バイパスは、国道 415 号バイパスを起点とし、市道氷見駅朝日線を経由して国道 160 号に連絡する路線である。国道 160 号と市道氷見駅朝日線交差点の渋滞解消と、氷見高校と有磯高校の再編統合により開校された新氷見高校のアクセス道路として計画された。

平成 21 年 11 月 30 日には、氷見市教育委員会が建設予定地周辺の分布調査を実施し、新たに鞍川Ｅ遺跡の存在が確認された。試掘調査は、1598.08 ㎡を対象に、平成 23 年７月と 11 月に実施した。試掘調査では、遺跡の南側を中心に遺構・遺物が確認され、1,153 ㎡が本発掘調査の対象となった。

本発掘調査は、調査対象地南側約 840 ㎡を一次調査として平成 23 年 10 月から同 12 月に実施した。残る 361㎡（重複部分含む）は、二次調査として平成 24 年３月から同４月までの期間で実施した。

第１図　周辺の遺跡（Ｓ＝１／25,000）



第２図　鞍川地区の既往調査位置図（Ｓ＝１／5,000）

No.	遺跡名	遺跡№	種 別	時 代
1	鞍川E遺跡	394	散布地	不明
2	鞍川D遺跡	250	集落	古代・中世
3	鞍川中B遺跡	354	その他	弥生中期・中世・近世
4	鞍川中A遺跡	308	その他	中世・近世
5	鞍川寺田遺跡	97	散布地	縄文後期
6	鞍川B中世墓	139	中世墓	中世
7	鞍川諏訪杜遺跡	190	散布地	中世
8	鞍川A中世墓	138	中世墓	中世
9	鞍川C遺跡	224	散布地	中世
10	鞍川金谷遺跡	52	散布地	弥生後期
11	KB－2遺跡(仮称)	309	散布地	古代
12	KB－3遺跡(仮称)	310	散布地	古代
13	大野江溯遺跡	317	集落	中世
14	神明北遺跡	368	集落	中世
15	大野南遺跡	255	散布地	古代・中世
16	沖布B遺跡	92	散布地	古代
17	中尾新保谷内遺跡	49	集落	古墳・古代・中世
18	熊塚南遺跡	253	散布地	弥生後・古墳前・古代・中世
19	鞍川横羽毛遺跡	251	散布地	弥生後～古墳前
20	朝日谷内横穴	140	横穴墓	古墳
21	七軒町遺跡	163	散布地	縄文後期
22	朝日山城跡	219	城館	中世
23	朝日大山遺跡	361	散布地	弥生終末・中世・近世
24	蓮乗寺中世墓群	133	中世墓	中世
25	上日寺中世墓群	53	中世墓	中世
26	朝日山古墳群	292	古墳	古墳
27	朝日長山古墳	55	古墳	古墳(6世紀前半)
28	朝日修諸遺跡	210	散布地	中世
29	御座町遺跡	145	散布地	中世
30	比美浜遺跡	96	散布地	古代・中世
31	諏訪野A遺跡	107	散布地	古代
32	諏訪野B遺跡	108	散布地	古代・中世
33	加納金宮遺跡	109	散布地	古代・中世
34	稲積三屋野遺跡	59	散布地	古代
35	加納桜打遺跡	194	散布地	古代
36	加納谷内遺跡	373	散布地	縄文・古代・中世・近世
37	加納中程経塚	31	経塚	中世
38	加納中程古墳群・加納城跡	327	古墳・城館	古墳・中世
39	七分一古墳・古墓	328	古墳・中世墓	古墳・中世
40	七分一B遺跡	259	散布地	古代・中世
41	七分一堂口遺跡	372	散布地	古代
42	大野中遺跡	371	散布地	古代

第１表　周辺遺跡対応表

第２節　調査の経過

二次調査

（１）調査の方法

本調査にあたっては、表土掘削後に世界測地系（測地成果 2011）平面直角座標系第Ⅶ系を用いて５ｍ間隔にグリッド杭を設定し、東西をＸ軸、南北をＹ軸とした。Ｘ軸方向に西からアラビア文字、Ｙ軸方向に南からアルファベットを割り振ってグリッド番号を設定した（第３図）。

表土はバックホウで、遺物包含層は人力で掘削した。引き続き遺構を検出し、遺構略測図を作成した。遺構は、半截もしくはセクションベルトを残して掘削し、土層を記録した後、完掘した。遺構の測量は空中写真測量で実施し、必要に応じてトータルステーションによる補備測量を実施した。

（２）調査の日程

平成 24 年３月５日より調査を開始した。３月 14 日に調査区周辺の整備として、安全柵を設置した。15 日にバックホウによる表土掘削を開始し、16 日に完了した。

３月 19 日にグリッド杭を設置した。

３月 21 日より発掘作業員による包含層掘削を開始し、４月３日に終了した。

３月 30 日より遺構検出を開始し、４月４日に終了した。

３月 30 日より平板による略測図作成を開始し、４月３日に終了した。

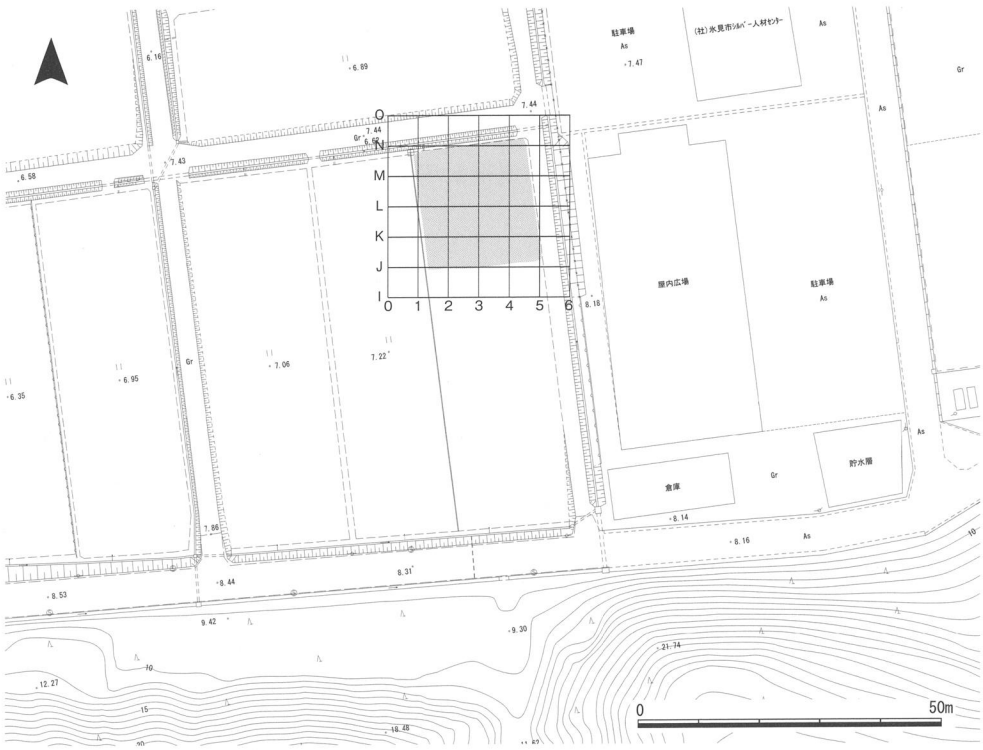
４月３日に遺構検出状況写真を撮影し、遺構掘削を開始した。以後、平面図・断面図等の図面作成および遺物の取上げを順次実施し、調査を進めた。

４月 10 日に全ての遺構掘削を終了し、４月 12 日にローリングタワーによるブロック撮影を行った。

４月 13 日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量および土量管理測量を行った。

４月 14 日から 18 日にかけて補備測量、下層確認等を実施し、資材を撤収した。

４月 19・20 日にバックホウによる調査区の埋戻しを行い、調査を終了した。



第３図　鞍川Ｅ遺跡　調査区位置・グリッド配置図（Ｓ＝１／1,250）

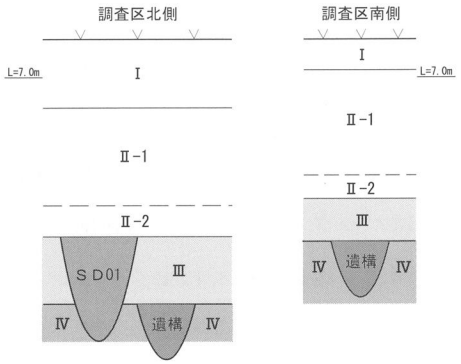
第３章　調査の成果

第１節　基本層序

地山の地形は山側である南から北へ向けて低くなっている。遺物包含層は地形に応じて堆積しており、最も厚い北端部で約０.５ｍを測る。表土と遺物包含層の間には、造成土とみられる約０.７ｍを測る厚い盛土がみられる。

調査区南西部には黒色砂質シルトの包含層はほとんど存在せず、厚さ約０.５ｍを測るにぶい黄褐色砂質シルトの包含層が部分的に広がる。

第Ⅰ層：水田耕作土（にぶい黄褐色細粒シルト）、第Ⅱ層：造成土２層（灰黄褐色細粒砂質シルト・灰黄褐色粘質土）、第Ⅲ層：遺物包含層（黒色細粒砂質シルト・にぶい黄褐色細粒砂質シルト）、第Ⅳ層：地山（黄色中粒砂質シルト）である。遺構検出面は第Ⅳ層上面である。第Ⅳ層には砂岩ブロックが混入している。



耕作土	Ⅰ	10YR4/3	にぶい黄褐色細粒砂質シルト
造成土	Ⅱ-1	10YR4/2	灰黄褐色細粒砂質シルト
		10YR7/3	にぶい黄色粘土ブロック混
造成土	Ⅱ-2	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
遺物包含層	Ⅲ	10YR2/1	黒色細粒砂質シルト
		10YR5/3	にぶい黄褐色細粒砂質シルト
地山	Ⅳ	5YR7/6	黄色中粒砂質シルト

第４図　基本層序模式図（Ｓ=1／40）

第２節　遺構

今回の調査では、自然流路・溝（ＳＤ）、土坑（ＳＫ）、ピット（ＳＰ）を検出した。調査区は中央を南北に流れる自然流路ＳＤ01により東西に分断され、遺構は調査区の北西および南東（ＳＤ01東岸）に集中している。遺構の埋土は、古代以降に堆積したと考えられる第Ⅲ層（遺物包含層）を主体とする。第Ⅲ層は弥生時代終末期～中世の遺物を包含し、近世・近代の遺物を含まないことから、堆積時期は中世～近世の間と推定できる。壁面の土層観察の結果、遺構形成時期は第Ⅲ層上面と第Ⅳ層上面に分かれ、遺構出土遺物の観察結果から、第Ⅲ層上面の遺構の時期は近世、第Ⅳ層の遺構の時期は古代～中世のものである可能性が高い。

なお遺構番号については、現地調査当時のものを本書でも使用しているため、番号が欠番となっているものがある。ここでは実測した遺物が出土した遺構を中心に詳述し、遺物が出土した遺構については別途一覧表でまとめることとする。

自然流路・溝

ＳＤ01（第６・８図）グリッドＪ２～Ｍ３の範囲に位置し、調査区中央を南北方向に縦断する流路である。検出長18.7ｍ、最大検出幅3.04ｍ、深さ0.46～0.85ｍを測る。調査区の南側は東西方向に延びる丘陵に南北方向の谷地形があり、この谷が当遺構の延長上に位置することから、ＳＤ01はこの谷からの流路であると考えられる。前年度に調査を行った南側隣接調査区のＳＤ01と同一遺構である。埋土は黒色シルトを基調とし、褐灰色砂質シルトや黄色砂質シルト（地山）ブロック等が混じる。また遺構上面中央に灰色砂が南北方向に貫く形で溝状に堆積している。流路の肩部や底面には砂岩ブロックが数箇所確認できる。遺物は弥生終末期～中世の土器などがあり、灰色砂層から弥生土器（終末期）、古墳土師器、古代須恵器、珠洲焼、石製品（剥片）が、それ以外から弥生土器（終末期／遺物番号21、

以下番号のみ)、古墳土師器の高坏（19、28)、中世土師器皿（47)、古代須恵器（53・57・58)、珠洲焼(66・67・68・70・71)、土製品（土錘 50)、獣骨、鉄滓が出土している。そのなかには漆膜が付着した須恵器などもみられる。

ＳＤ02（第６・９図）調査区北西部、グリッドＬ１の範囲に位置し、南東-北西方向に流れる溝である。検出長3.15ｍ、最大検出幅0.7ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は弥生終末～古墳初頭の壺、器台（24)、装飾器台（27）が出土した。

ＳＤ03（第６・７図）調査区南東部、グリッドＪ４の範囲に位置し、東西方向に流れる溝である。検出長2.7ｍ、最大検出幅0.85ｍ、深さ0.25ｍを測る。東壁以東に延びる。埋土は黒色シルトを基調とし、上下２層に分かれる。遺物は古墳土師器の小片が中心であり、上層埋土からは12～13世紀の中世土師器皿（48）が出土した。

ＳＤ04（第６・９図）調査区北西部、グリッドＬ１の範囲に位置し、東西方向に流れる流路である。検出長0.55ｍ、最大検出幅0.7ｍ、深さ0.49ｍを測る。西壁以西に延びる。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の壺（５)、高杯（29)、不明土製品が出土した。

ＳＤ05(第６・９図)調査区北西部、グリッドＭ１の範囲に位置し、南東-北西方向に流れる流路である。検出長2.0ｍ、最大検出幅0.5ｍ、深さ0.46ｍを測る。西壁以西に延びる。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は弥生終末期の器台、古墳～古代土師器の小片、不明土製品が出土した。

ＳＤ06（第６・９図）調査区南部、グリッドＪ３の範囲に位置し、東西方向に流れる流路である。検出長1.55ｍ、最大検出幅0.35ｍ、深さ0.16ｍを測る。西端部をＳＤ01に切られる。埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の高杯、古代須恵器杯身（54）が出土した。

ＳＤ07（第６・９図）調査区北西部、グリッドＬ１の範囲に位置し、東西方向に流れる流路である。検出長0.45ｍ、最大検出幅0.36ｍ、深さ0.27ｍを測る。西壁以西に延びる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の壺（15)、鉢（39）などが出土した。

土坑

ＳＫ01（第６・９図）調査区中央南西、グリッドＫ２の範囲に位置するやや大型の楕円形土坑である。最大径0.88ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器小片が出土した。

ＳＫ02（第６・９図）調査区北側、グリッドＭ２の範囲に位置する円形の土坑である。最大径0.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は褐灰色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器が出土したが、小片のため実測していない。そのほか鉄滓が出土した。

ＳＫ07（第６・９図）調査区北西、グリッドＭ１の範囲に位置する円形の土坑である。最大径0.65ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は単層で黒褐色シルトを基調とする。遺物は古代須恵器が出土した。

ＳＫ09(第６・９図)調査区西側、グリッドＬ１に位置する円形の土坑である。最大径0.65ｍ、深さ0.43ｍを測る。埋土は上層がにぶい黄褐色シルトを、下層が褐灰色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器（１・35）が出土した。

ＳＫ10（第６・９図）調査区中央北東、グリッドＬ３の範囲に位置する円形の土坑である。最大径0.52ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は褐灰色を基調とする。遺物は古墳土師器・古代須恵器が出土したが、小片のため実測していない。

ＳＫ11（第６・９図）調査区北東、グリッドＭ３の範囲に位置する楕円形の土坑である。最大径0.87ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器（37）が出土した。

ＳＫ13（第６・10図）調査区北側、グリッドＭ２の範囲に位置する円形の土坑である。最大径0.64ｍ、深さ0.18ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器、鉄滓（釘ヵ？）が出土した。

ＳＫ16（第６・７図）調査区中央東端、グリッドＫ４に位置する円形の土坑である。調査区以東に拡がる。東壁で径0.96ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器（17・25）が出土した。

ＳＫ18（第６・10図）調査区西側、グリッドＬ１に位置する円形の土坑である。ＳＰ77に切られる。最大径0.4ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は灰褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器（23）・珠洲焼が出土した。

ＳＫ19（第６・10図）調査区南側、グリッドＪ２の範囲に位置し、平面形が隅丸長方形を呈する大型の土坑である。東側をＳＤ01に切られる。長軸1.71ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は上層が黒褐色シルトを、下層が褐灰色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器・古代須恵器（65）・珠洲焼が出土した。

ＳＫ20（第６・８・10図）調査区中央北東、グリッドＬ３の範囲に位置する円形の土坑である。ＳＰ94に切られる。最大径0.33ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は褐灰色シルトを基調とする。遺物は珠洲焼（74）が出土した。

ピット

調査区内で検出したピット数は103を数える。調査区北西およびＳＤ01東岸に集中しており、規則性を持つものが一定量みられた。以下、実測した遺物が出土した遺構を中心に記述する。

ＳＰ14（第６・10図）調査区中央北西、グリッドＬ１に位置する。最大径0.41ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は中世土師皿（49）が出土した。

ＳＰ15（第６・10図）調査区中央やや北西、グリッドＬ２に位置する。最大径0.39ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は褐灰色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器（32）が出土した。

ＳＰ22（第６・10図）調査区北側、グリッドＭ２に位置する。最大径0.3ｍ、深さ0.17ｍを測る。埋土は褐灰色シルトを基調とする。遺物は古代須恵器（56）が出土した。

ＳＰ24（第６・10図）調査区西側、グリッドＬ１に位置する。最大径0.18ｍ、深さ0.23ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古代須恵器、鉄滓が出土した。

ＳＰ37（第６・10図）調査区中央南東、グリッドＫ３に位置する。最大径0.25ｍ、深さ0.19ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は珠洲焼（72）が出土した。

ＳＰ61（第６・10図）調査区中央南東、グリッドＪ３に位置する。最大径0.4ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の小片、骨が出土した。

ＳＰ77（第６・10図）調査区北西、グリッドＬ１に位置する。最大径0.27ｍ、深さ0.21ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は弥生終末期の器台が出土した。磨滅が著しく小片のため図示していないが、装飾器台の器受部の可能性が高い。

ＳＰ87（第６・10図）調査区南東端、グリッドＪ４に位置する。最大径0.2ｍ、深さ0.13ｍを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は古墳土師器の壺（10）が出土した。

第３節　遺物

今回の調査では、弥生土器（終末期）、古墳土師器、古代須恵器、古代土師器、中世土師器、珠洲焼、その他陶磁器類（白磁、越中瀬戸）、土製品（土錘、不明土製品）、金属製品、石製品（磨石、砥石、剥片）、動物遺体（種子、獣骨）など、遺物整理箱 24 箱分の遺物が出土している。本書ではそのうち 75 点を図示した。遺物の記載は種別ごとに行い、観察表にデータを記載した。本文中で出土地点にふれていないものは基本的にⅢ層（包含層）出土である。

なお珠洲焼については隣接する一次調査の報告書と同様、吉岡康暢氏の器種分類および７期編年（吉岡 1994）に準拠した。暦年代はⅠ期：12 世紀後半、Ⅱ期：13 世紀前半、Ⅲ期：13 世紀中葉～ 1270 年代、Ⅳ期：1280 年代～ 1370 年代、Ⅴ期：1380 年代～ 1440 年代、Ⅵ期：1450 年代～ 1470 年代、Ⅶ期：1480 年代～ 1500 年代と比定されている。

（１）土器・陶磁器類（第 10 図～ 12 図）

弥生土器・土師器

１～８は壺である。１は有段壺の口縁部。口縁部軽く外傾し端部に向かって直線的に延びる。端部はそのまま丸くおさめる。器厚は薄く内外面ミガキ調整を施す。ＳＫ 09 から出土した。２は口縁部が２段を呈する壺。口縁は体部からやや外傾して伸び、端部で再び段を形成し摘み上げる。端部はそのまま丸くおさめる。有段口縁下段には凹線と円形刺突を、上段下部にはキザミを施す。３は直口壺の口縁下部～肩部。口縁部に凹線を施す。４、５は有段壺の口縁。４は口縁下部に２連の円形浮文を施す。５は内外面にミガキ調整を、外面に赤彩を施す。ＳＤ 04 から出土した。６は有段口縁の壺。口縁部が外傾し、端部に向かって直線状に伸びる。口縁下端に稜を持つ。内外面にミガキ調整を施す。７は大型の有段壺である。口縁はやや外傾し端部に向かって直線的に伸びる。８は有段壺の口縁。口縁端部で外側に返して２重とし、下端部をおさえて有段部つくる。内外面にヨコナデを施す。９は短頸壺である。体部の最大径を下半に持つ長胴型の形態であり、口縁部は軽く外傾し端部は丸くおさめる。胴部は外面にタテハケ、内面上部にヨコハケを施す。時期は古墳時代前期前半である。

10 ～ 18 は甕である。10・11 は有段甕の口縁部。10 の口縁はやや外傾し、端部に向かって直線的に伸びる。内外面ヨコナデを施す。ＳＰ 87 から出土した。11 の口縁はやや外反して伸びる。12 は擬凹線甕。口縁はやや外傾して伸び、端部が外反する。口縁下端に粘土接合痕が残る。13 は有段甕の口縁～体部。口縁部は直立し、端部はそのまま丸くおさめる。体部外面の調整はハケメである。14、15 は受口甕。14 の肩部は口縁に向かって強く屈曲し口縁部を上方に摘み上げる。口縁下端に稜を持つ。口縁部内外面にヨコナデを施す。15 は口縁端部で内側に屈曲し、そのまま直立する。調整は内面にヨコハケ、外面にタテハケを施す。ＳＤ 07 から出土した。16 は付加状甕の口縁。Ⅰ層から出土した。17 は平縁甕。口縁部が外方に屈曲して伸び、端部は面取りして外側に向かっておさめる。ＳＫ 16 から出土した。18 は壺甕類の底部である。底部外面中央を輪高台状に仕上げる。内外面に縦方向の板ナデを施す。

19 ～ 34 は高杯・器台である。19 ～ 21 は高杯の杯部。いずれも有段高杯である。19 は口縁が端部に向かってやや外反気味に伸び、端部はそのまま丸くおさめる。外面にミガキ調整がみられる。ＳＤ 01 から出土した。20 は口縁が端部に向かってやや外傾し直線的に伸びる。口縁上端は丸くおさまり、下端は垂下する。内外面ミガキ調整を施す。21 は体部がやや内湾し、口縁は下部でやや屈曲し端部に向かって外反して立ち上がる。杯下部に明瞭な段を持ち、下端が垂下する。内外面ハケのちミガキ調整を施す。

ＳＤ 01 から出土した。22 ～ 25 は器台の口縁部。22 は擬凹線器台。口縁部がやや外反し端部に向かって直線状に伸びる。上端はそのまま丸くおさめ口縁下端は垂下する。内外面ミガキ調整を施す。23・24 は有段器台。いずれも端部付近で屈曲し、ほぼ垂直に伸びる短い受部を持つ。口縁下端がやや垂下する。内外面ミガキ調整ののち、24 は外面に赤彩、25 は内外面に赤彩を施す。24 はＳＫ 18 から、25 はＳＤ 02 から出土した。25 は小型器台の口縁部。体部がやや内湾気味に伸び、端部を面取りする。体部は外面ハケ後ミガキ調整、内面ミガキ調整で、口縁内外面にヨコナデがみられる。ＳＫ 16 から出土した。26 は小型の器台の受部である。口縁部がやや外反気味に立ち上がる。胎土に混和材として赤褐色砂粒が多く含まれる。内外面ミガキ調整を施す。透孔が２ヵ所みられる。試掘トレンチで取上げた。19 ～ 26 の時期は、19 ～ 25 は弥生時代終末期～古墳時代初頭であり、26は古墳時代前期である。

27 は装飾器台である。器受部の内外面にミガキ調整を施し、上面・口縁部外面は全面に、下面には放射状に赤彩を施す。透孔は台形状を呈していた可能性が高く、同一方向を向き 12 ヵ所程度施されていたと考えられる。器受部の径が約 18 ㎝と大型なことから、帰属時期は全体的な出土遺物の傾向よりやや古相、月影Ｉ式期のものと考える。

28 ～ 31 は高杯の脚部である。28 は外面ハケのちミガキ調整を施す。ＳＤ 01 から出土した。29 は摩滅が著しく調整は不明である。ＳＤ 04 から出土した。30 は外面に縦方向のミガキ調整を施すが摩滅が著しく不明瞭である。31 は外面にミガキ調整のち赤彩を施す。32 ～ 34 は器台の脚部である。32 は外面にミガキを、内面にハケ調整を施す。透孔が１ヵ所みられる。ＳＰ 15 から出土した。33 は外面にミガキ調整を施す。透孔は４方向に施す。34 の調整は摩滅が著しいため不明である。透孔は４方向に施す。28 ～ 34 の時期はいずれも低脚化が進行する古墳時代初頭以降のものである。

35 ～ 39 は鉢である。35 ～ 38 は有段鉢である。35 は体部半ばで内側に屈曲し、直立気味に立ち上がる体部から短い口縁が外傾して伸びる。体部外面はハケ調整、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は板ナデを施す。ＳＫ 09 から出土した。36 は体部が底部から緩やかに内湾気味に立ち上がる。口縁部は軽く外反して伸び、端部を丸くおさめる。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。37 は口縁部がやや外反気味に伸びる。内外面にミガキを施す。ＳＫ 11 から出土した。38 の口縁部はやや外反気味に伸びる。内外面とも摩滅が著しいが、体部内面の一部にミガキ調整がみられる。39 は丸みを帯びた体部から口縁部がくの字に屈曲し、口縁端部に向かってやや内湾気味に伸びる。端部は丸くおさめる。内外面ハケ調整である。ＳＤ 07 から出土した。35・36 は弥生時代終末期、37 ～ 39 は古墳時代初頭～前期のものである。

40・41 は蓋である。いずれも鈕をもつ。40 の体部はやや外反して伸び、端部を丸くおさめる。外面はミガキ調整、内面はハケ調整を施す。41 の鈕頂部は窪むが、先端部はそのまま仕上げる。体部外面にミガキ調整を施す。

42・43 はいずれも鉢形のミニチュア土器である。

44 は椀である。口径 14 センチ前後。平底の底部から体部が緩やかに立ち上がる。摩滅が著しく調整は不明である。45 は杯である。丸底の底部から緩やかに体部が立ち上がり、口縁部は内側に屈曲して直立する。端部は丸くおさまる。46 は無台椀。体部が直線状に立ち上がり、半ばで外側に軽く屈曲して伸びる。端部はそのまま丸くおさめる。口径は 12 ㎝台である。時期は 10 世紀と考えられる。

47・48は中世土師器の皿である。47は柱状高台を持つ。高台が裾で広がり、底部はロクロナデで仕上げる。ＳＤ01から出土した。48の体部は内湾気味に緩やかに立ち上がり、口縁部はそのまま薄く仕上げる。ロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。ＳＤ03から出土した。時期は47が11世紀後半～12世紀前半、48が12～13世紀である。49は中世土師器の皿か。体部が口縁端部に向かって直線状に伸びる。ＳＰ14から出土した。

須恵器

52～60は杯である。52・53は杯蓋である。52は杯Ｇ蓋、53は杯Ｂ蓋である。53は生焼けである。52はⅢ層、53はＳＤ01から出土した。54は杯身である。ＳＤ06から出土した。55は杯Ａ身である。56～60は杯Ｂ身である。高台は56～58には低い高台が、59・60には比較的高い高台を貼り付ける。60には焼き膨れがみられる。56はＳＰ22、57・58がＳＤ01から出土した。

61は短頸壺である。肩部が強く張り、凹線が1条巡る。体部外面にケズリ調整を施す。62は横瓶である。口縁端部をつまみ出し、内側に凹線を一条巡らせる。体部外面にはタタキのちカキメ、内面は同心円文の押圧具痕が残る。61、62の時期は８世紀と考えられる。63～65は甕である。63の体部外面には平行タタキ、内面に同心円文の押圧具痕が残る。時期は８～９世紀である。64は底部である。丸底の外面にはタタキ、内面には同心円文の押圧具痕が残る。65は大甕の口縁部である。口径約66㎝を測る。口縁部に外面に波状文を施す。63･64はⅢ層から､65はＳＫ19から出土した。時期は52が7世紀後葉～8世紀初頭、それ以外は８世紀半ば～９世紀と考える。

珠洲焼

66～73は珠洲焼である。66～71は鉢・擂鉢である。66～69は口縁部である。いずれも体部は口縁に向かって内湾気味に立ち上がり、端面がほぼ水平である。66の口縁部端面には凹線が1条巡る。Ⅰ期。67・48はⅡ期。69は片口部分である。内面に卸目が数条みられる。70は体部。内面に流水状の卸目を施す。時期はⅡ期。71は甕の底部。底径約20㎝を測る大型品である。内面に1単位13条の卸目を放射状に施す。時期はⅢ～Ⅳ期。70・71は破損後に被熱したため、煤が全体に付着している。66～68・70・71がＳＤ01から出土した。

72は装飾壺である。体部外面に草木状の櫛目線刻文を施す。時期はⅡ～Ⅲ期。ＳＰ37から出土した。73は甕である。体部外面にタタキ、内面に当て具痕がみられる。ＳＫ20から出土した。74は甕の底部である。

その他

75は白磁碗の口縁部。体部が口縁端部に向かって直線的に立ちあがる。端部はそのまま丸くおさめる。器厚3㎜程度で釉が薄い。胎土に黒色粒がみられる。体部外面に蓮弁文のしのぎの可能性がある不明瞭な線がみられることから青磁の可能性もある。

50は管状土錘である。樽形である。ＳＤ01から出土した。51は土製支脚である。短脚類である。表面が完全に剥離していることもあり、被熱痕は確認できない。

第４章　まとめ

今回の調査で得られた知見を整理しまとめにかえたい。

調査では自然流路・溝７条、土坑 21 基、ピット 103 基を確認した。遺構の大半が調査区の北西部および自然流路ＳＤ 01 東岸に集中していた。遺構の埋土は大きく①黒褐色シルト、②黒褐色シルトを基調とするが地山などをブロック状に一定量含むもの、③褐灰色シルトの３種類に大別できる。柱痕を伴わないため掘立柱建物と断定できないが、調査区北西のピット群に３棟、ＳＤ 01 東岸のピット群に１棟、配列に規則性があるものがある。いずれも総柱建物と考えられ、ピット径の小さいものが多い。また出土した中近世の遺物が中世前半のものが大半であることから、この時期のものである可能性が高い。

調査区中央を南北に縦断する自然流路ＳＤ 01 は、昨年度調査した隣接調査区のＳＤ 01 と同一のものである。埋土はにぶい黄褐色／灰黄褐色砂および黒褐色砂質シルトが主体であり、それぞれを基調とする層が互層をなして堆積する。黒褐色砂質シルトは第Ⅲ層（遺物包含層）に由来し、にぶい黄褐色／灰黄褐色砂は谷からの流れ込みと考えられる。流入時期は古代から近世にかけて主に４期に分かれると考えられるが、出土遺物に明確な時期差はみられなかった。ただ、遺構上面が造成土に切られているため、近世以降も存続していた可能性も否定できない。

遺物は、第Ⅲ層およびＳＤ 01 から弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器、須恵器、珠洲焼などが多く出土している。弥生土器･古墳土師器の器種は壺、甕、鉢、蓋、高杯、器台等がある。その特徴として、①小型器台形土器や装飾器台の出土、②当該時期の山陰や近畿など外来系の影響がみられる土器の出土、③器台や高杯に棒状脚が少ないことに加え、低脚化が進展していること、などがあげられる。以上の傾向および遺物の観察結果から、弥生時代終末期の白江式を中心とし、古墳時代前期までの土器群に相当すると考えられる。また、この時期の遺物のなかで特筆すべきものとして、装飾器台が挙げられる。装飾器台は弥生時代終末期から古墳時代早期に限定された器種であり、主に北陸南西部を中心に流通する。特に古相のものは外来系の土器が波及する前段階に地域間の交流が始まったことを示唆するとされる。県内では富山市以西でのみ出土事例あり、氷見市内では小久米Ａ遺跡で、近年の調査では高岡市蔵野町東遺跡で12個体以上出土している。装飾器台は様々な研究者により分類されており、受部径や器受部口縁・透孔の形態分類、施された装飾や赤彩などに着目されている。当遺跡の出土した装飾器台は楠分類Ａ２類にあたり、器受部口縁が上下に拡張するものである。また器受部上面・口縁部外面の全体に赤彩が施され、器受部下面に装飾状の赤彩が放射状に施される。透孔が同一方向を向いていることを含め、能登の影響をうけたものと考えられる。

古代の遺物は須恵器の杯・壺・甕・横瓶などのほか、土師器は杯・皿などが少量出土しており、帰属時期は８世紀半ば～９世紀中頃までのものを中心とし、僅かに８世紀前半に遡るものと 11 ～ 12 世紀に降るものがある。中世の遺物は 12 世紀後半～ 13 世紀前半の珠洲焼がほとんどであり、出土量も少ない。時期の明確な遺構が少ないこととあわせ、古代から中世前半にかけて当遺跡は集落の中心から外れた縁辺部であったと考えられる。今回の調査は鞍川Ｅ遺跡の二次調査であり、南側に隣接する一次調査の結果と出土遺物の時期との整合性がある。古代・中世の遺跡である鞍川Ｄ遺跡が北西数十ｍに位置していることから、当該期の集落の中心は当遺跡の北西側に広がる可能性が高い。

前回の調査とあわせてみてみると、出土遺物の時期が弥生時代終末期～古墳時代初頭、８世紀半ば～９世紀、12 世紀後半～ 13 世紀前半に集中しており、当遺跡周辺地域では、これらの時期を中心に人々の営みが盛んであったと考えられる。

引用・参考文献

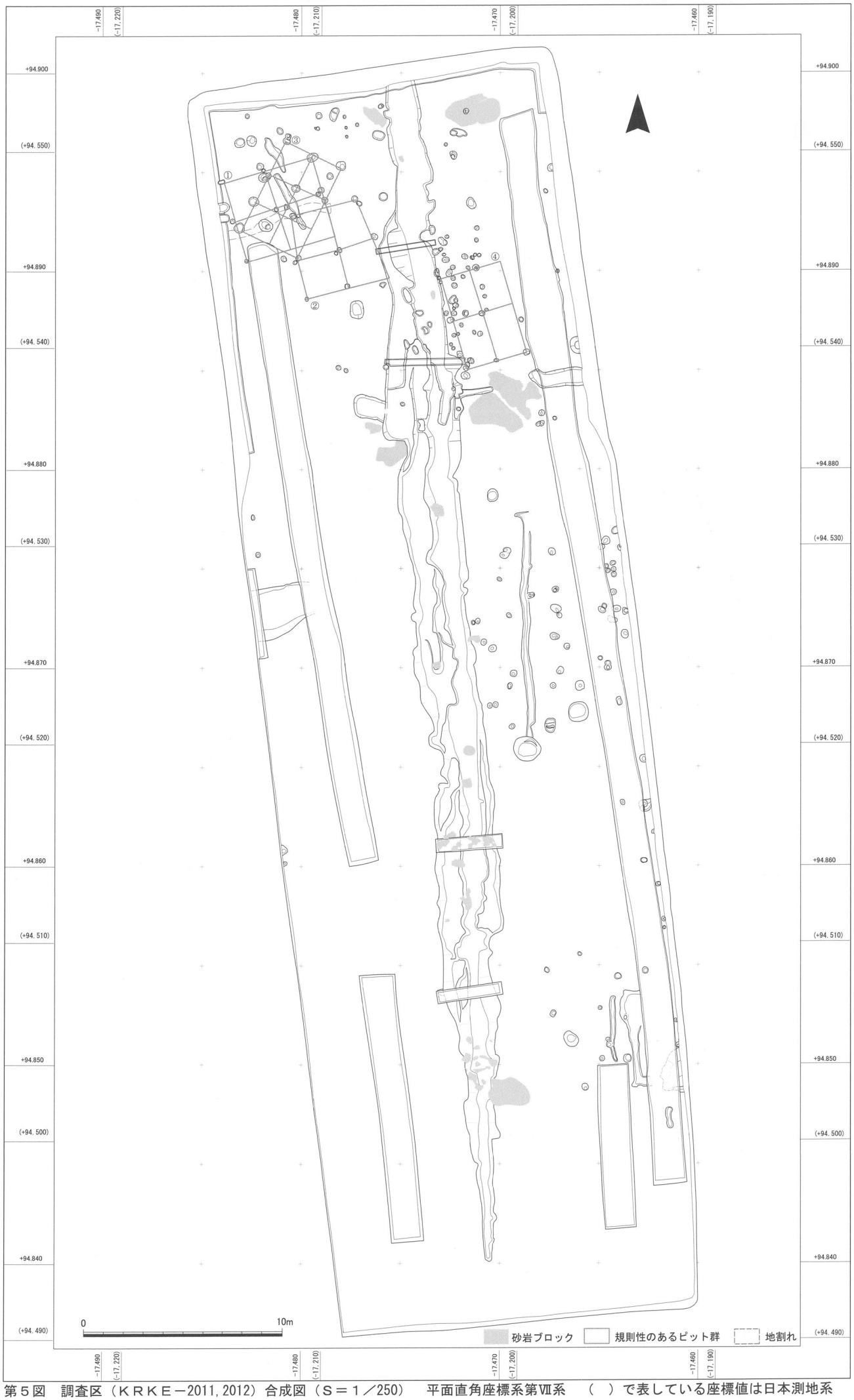
青山　晃　2010「蔵野町東遺跡出土の装飾器台について」『富山考古学研究』第 13 号　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
池野正男　2012「越中の古墳時代土器様相」『大境』第 31 号　富山考古学会
楠　正勝　2003「装飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究ＸＸVI』庄内式土器研究会
田嶋明人　1986「Ⅳ　考察　－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』埋蔵文化財発掘調査報告第７集
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1998『五社遺跡発掘調査報告（第一分冊）』埋蔵文化財発掘調査報告第９集
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告（第五分冊）』埋蔵文化財発掘調査報告第 31 集
児島清文　1962『氷見市地名考』氷見報知新聞社
氷見市　1999『氷見市史』9 資料編 7 自然環境
氷見市　2000『氷見市史』6 資料編 4 民俗、神社・寺院
氷見市　2002『氷見市史』7 資料編 5 考古
氷見市　2006『氷見市史』1 通史編 1 古代・中世・近世
氷見市教育委員会 2005『鞍川中Ａ遺跡　鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅰ』氷見市埋蔵文化財調査報告第 41 冊
氷見市教育委員会 2006『鞍川Ｄ遺跡　鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅱ』氷見市埋蔵文化財調査報告第 44 冊
氷見市教育委員会 2006『鞍川中Ｂ遺跡　鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅲ』氷見市埋蔵文化財調査報告第 45 冊
氷見市教育委員会 2010『金沢医科大学氷見市民病院建設事業に伴う試掘調査概要　鞍川Ｄ遺跡　鞍川中Ｂ遺跡』氷見市埋蔵文化財調査報告第 55 冊
氷見市教育委員会 2010『鞍川中Ｂ遺跡Ⅱ　金沢医科大学氷見市民病院建設事業に伴う発掘調査報告』氷見市埋蔵文化財調査報告第 57 冊
氷見市教育委員会　2012『氷見市内遺跡発掘調査概報Ⅱ　谷屋上ノ江遺跡　鞍川Ｅ遺跡　鞍川Ｄ遺跡　柳田南遺跡』氷見市埋蔵文化財報告第 59 冊
氷見市教育委員会　2012『鞍川Ｅ遺跡Ⅰ　市道鞍川霊峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（１）』氷見市埋蔵文化財報告第 60 冊
氷見市立博物館 2006『特別展　竹里山の謎にせまる　―山城・寺院・鞍河氏―』
堀大介　2009「補論 2 装飾器台の成立 」『地域政権の考古学的研究－古墳成立期の北陸を舞台として－』雄山閣
吉岡康暢　1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

遺構		地区	最大幅(径／m)	深さ(m)	出土遺物 土器 種別	出土遺物 土器 器種	出土遺物 その他	備考	
SD	01	2・3/J～M	3.04/2.34	0.46/0.85	弥生土器(終末期)、古墳土師器、古代土師器、古代須恵器、珠洲焼	弥生土器(終末)壺・高杯・器台、古墳土師器壺・甕・鉢・蓋、古代土師器壺、土師器小片、古代須恵器杯身・杯蓋・壺？・甕、珠洲擂鉢・鉢・甕	土錘・鉄滓・獣骨	検出長18.7m、SD06・SK19を切る	19 21 28 47 50 53 57 58 66 67 68 70 71
	02	L1	0.7	0.25	弥生土器・土師器	高杯、壺、高杯か器台、装飾器台、土師器小片	－	検出長3.15m	24 27
	03	K4	0.85	0.25	土師器・中世土師器	高杯か器台、中世土師器皿	－	検出長2.7m	48
	04	L1	0.7	0.49	弥生土器・土師器	赤彩壺、高杯、土師器小片	不明土製品	検出長0.55m	29
	05	M1	0.5	0.46	弥生土器・土師器・須恵器	赤彩装飾器台、土師器小片、須恵器大甕	土製支脚？	検出長2.0m	－
	06	J3	0.35	0.16	弥生土器、土師器・須恵器	高杯、土師器小片、須恵器杯身	－	検出長1.55m、SD01に切られる	54
	07	L1	0.36	0.27	弥生土器・土師器	壺、鉢、器台	－	検出長0.45m	15 39
SK	01	K2	0.88	0.3	土師器	壺、小片	－		－
	02	M2	0.5	0.2	土師器	小片	鉄滓	①柵列か4間×2間の南北棟総柱建物か(SK02・05・06・15・18・SP12・14)	－
	04	M1	0.57	0.32	土師器	壺、高杯か器台、小片	－		－
	05	L1	0.65	0.23	土師器	小片	－	①	－
	06	M2	0.55	0.3	土師器	壺甕類小片(口縁含む)	鉄釘？	①③	－
	07	M1	0.65	0.25	須恵器	甕体部片	－		－
	09	L1	0.65	0.43	土師器	小片(口縁含む)	－		1 35
	10	L3	0.52	0.3	土師器・須恵器	土師器高杯か器台・小片、須恵器壺・甕小片	－		－
	11	M3	0.87	0.2	土師器	鉢か椀、小片	－		37
	13	M2	0.64	0.18	土師器	土師器小片	－		－
	14	L2	0.43	0.15	土師器	土師器小片	－		－
	15	L1	0.48	0.15	土師器	土師器小片	－	①	－
	16	K4	1	0.24	弥生土器・土師器	弥生土器鉢か椀・壺、土師器小片	－		17 25
	18	L1	0.4	0.25	土師器	高杯(赤彩)	－	SP77に切られる	23
	19	J2	1.71	0.3	土師器・須恵器・珠洲焼	土師器壺甕類・鉢・高杯か器台・小片、須恵器瓶？・甕、珠洲甕、中世土師器?小片	－	SD01に切られる	65
	20	L3	0.33	0.15	珠洲焼	甕	－	SP94に切られる	74
	21	M2	0.45	0.3	土師器	小片	－		－
SP	01	K2	0.21	0.19	土師器	土師器小片、中世土師器？小片	－	②2間×2間の総柱建物か(SP01・05・15・16・17・19)	－
	03	K2	0.42	0.2	土師器	土師器小片	－		－
	05	L2	0.19	0.22	土師器	土師器小片	－	②	－
	06	L2	0.2	0.2	須恵器	甕	－		－
	09	L2	0.34	0.3	土師器	小片	－		－
	10	L2	0.45	0.25	土師器	壺、小片	－	①	－
	14	L1	0.41	0.2	土師器	中世土師器	－	①	49
	15	L2	0.39	0.1	弥生土器	器台	－	②	32
	16	L1	0.25	0.1	土師器	小片	－	②	－
	22	M2	0.3	0.17	須恵器	杯身	－		56
	24	L1	0.18	0.23	土師器・須恵器	土師器小片、須恵器壺	鉄滓	③2間×2間の東西棟総柱建物か(SP07・24・25・74・76・99・SK06)	－
	37	K3	0.25	0.19	珠洲焼	装飾壺(草花文？)	－		72
	41	L3	0.21	0.15	土師器	小片	－		－
	49	K4	0.25	0.231	土師器	小片	－	④3間×3間の南北棟総柱建物か(SP31・34・38・49・58・96・98)	－
	51	K3	0.24	0.1	須恵器	甕小片	－		－
	52	K3	0.25	0.1	土師器	小片	－		－
	53	K3	0.43	0.22	土師器	小片	－		－
	55	K3	0.37	0.15	土師器・須恵器	土師器壺・小片、須恵器甕・小片	－		－
	58	K3	0.23	0.29	土師器	壺底部	－	SP59を切る・④	－
	60	K3	0.29	0.23	土師器	小片	－	SP59を切る	－
	61	J3	0.4	0.3	土師器	小片	骨		－
	66	M3	0.25	0.16	土師器	小片	－		－
	69	J4	0.4	0.17	土師器	小片	－		－
	70	J4	0.33	0.17	土師器	小片	－		－
	72	L3	0.53	0.34	須恵器	甕	－		－
	73	K3	0.29	0.25	土師器	鉢か椀、小片	－		－
	76	M1	0.18	0.17	須恵器	甕	－	③	－
	77	L1	0.27	0.21	弥生土器	器台か高杯	－	SK18を切る	－
	85	K3	0.26	0.13	土師器	小片	－		－
	87	J4	0.2	0.13	土師器	土師器壺、小片	－		10
	98	J2	0.24	0.18	土師器	小片	－		－

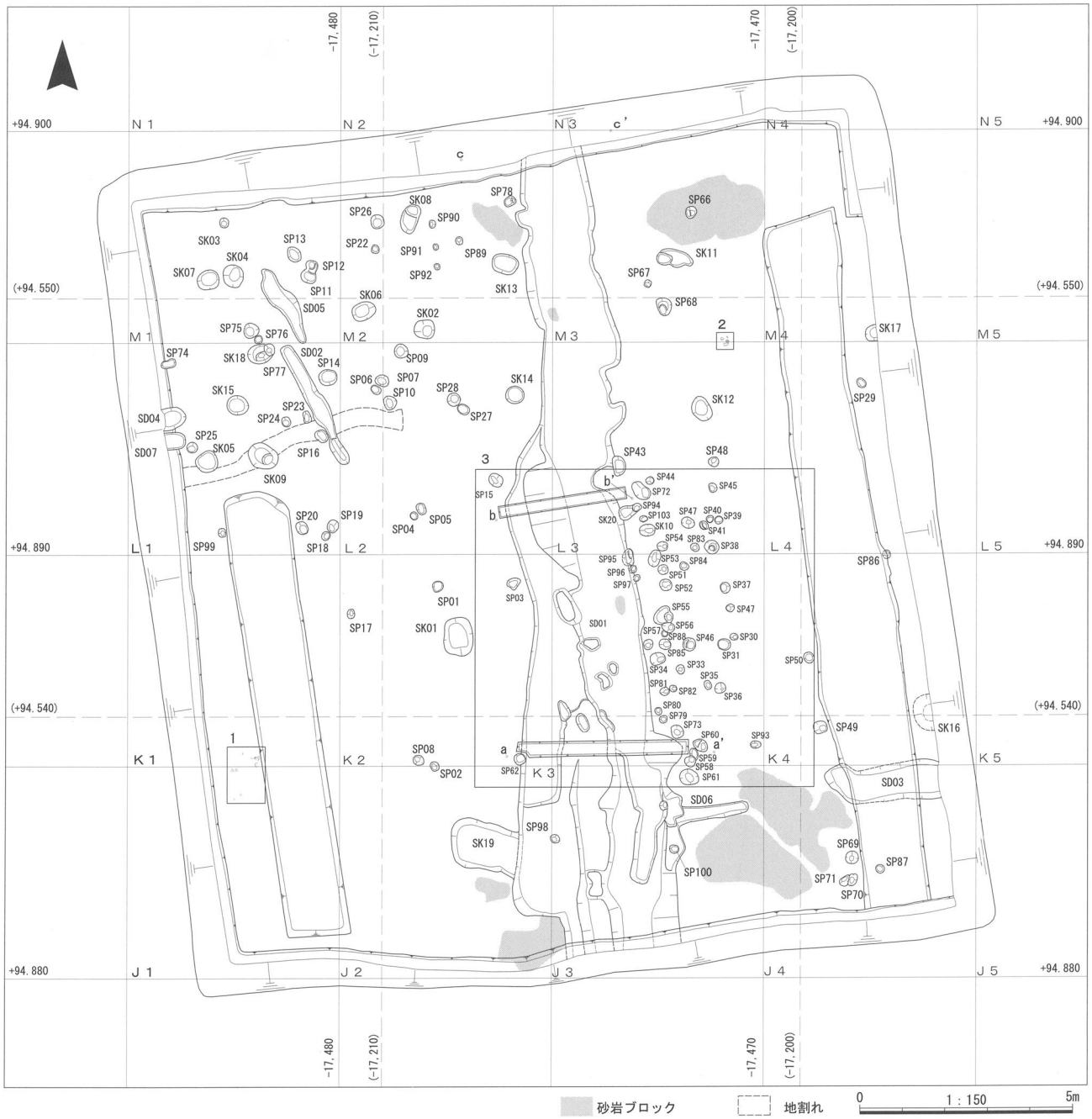
第２表　遺物出土遺構一覧表

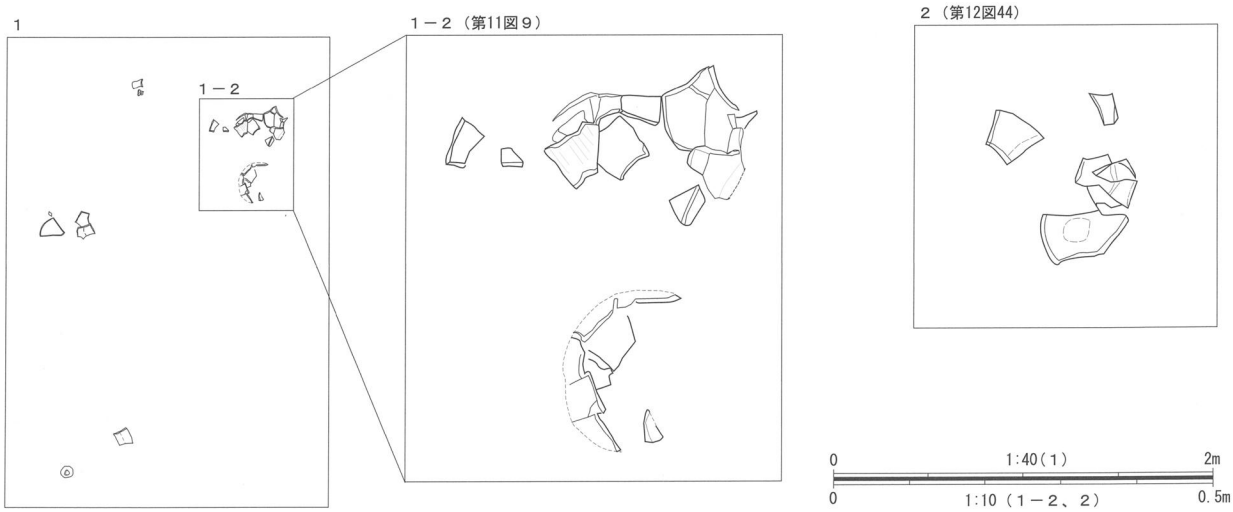
No.	地区	遺構・層位	種　別	器　種	法　量（cm）			胎土	焼成	色　調	残存率	備　考
					口径	器高	底径					
1	L1	ＳＫ09	土師器	壺	13.2	残存3.0	－	密	良	10YR8/3浅黄橙色	5%未満	
2	N3	Ⅲ層	土師器	有段壺	16.6	残存4.35	－	粗	良	外面　10YR4/1褐灰色 内面　10YR7/6明黄褐色	5%未満	口縁部に凹線＋円形刺突×2 ／口縁部キザミ
3	M4	Ⅲ層	土師器	直口壺	頸径6.8	残存5.15	－	密	良	5YR6/6橙色	5%	口縁部凹線文
4	M3	Ⅲ層	土師器	小型壺	10.0	残存4.85	－	密	良	7.5Y7/6橙色	10%	円形浮文（2連）
5	L1	ＳＤ04	弥生土器	有段壺	11.5	残存4.75	－	やや粗	良	胎土　10YR8/4浅黄橙色 赤彩　2.5Y4/8赤褐色	5%未満	外面赤彩
6	K1	Ⅲ層	弥生土器	有段壺	15.9	残存5.8	－	密	良	7.5YR5/3にぶい褐色	5%未満	
7	J2	Ⅲ層	土師器	有段壺	24	残存6.5	－	粗	良	7.5YR6/6橙色	5%未満	
8	M3	Ⅲ層	土師器	壺	13.8	残存2.6	－	密	良	10YR7/3にぶい黄橙色	5%未満	
9	K1	Ⅲ層	土師器	壺	14.5	33.6	5.85	粗	良	7.5YR8/4浅黄橙色	80%	古墳前期
10	J4	ＳＰ87	土師器	有段甕	30.6	残存4.3	－	粗	良	10YR8/3浅黄橙色	5%未満	
11	K1	Ⅲ層	土師器	有段甕	17.6	残存2.95	－	やや粗	良	10YR7/3にぶい黄橙色	5%未満	
12	M1	Ⅲ層	土師器	擬凹線壺	15.9	残存3.8	－	密	良	10YR8/3浅黄橙色	5%	口縁部擬凹線7条
13	K1	Ⅲ層	弥生土器	有段壺	13.6	残存8.9	－	密	良	5YR6/6橙色	10%	
14	M1	Ⅲ層	土師器	甕	21.2	残存4.0	－	粗	良	5YR7/6橙色	10%	
15	L1	ＳＤ07	土師器	壺か?	13.7	残存2.8	－	粗	良	10YR7/4にぶい黄橙色	5%未満	
16	K1	Ⅰ層	土師器	付加状甕	18.8	残存4.2	－	粗	良	外面　7.5YR7/6橙色 内面　10YR4/1褐灰色	5%未満	
17	K4	ＳＫ16	土師器	平縁甕	21.9	残存3.85	－	粗	良	10YR8/4浅黄橙色	5%未満	能登系／くの字口縁／古墳前期
18	M3	Ⅲ層	土師器	甕か	－	残存4.15	4.35	粗	良	7.5YR6/6橙色	5%	
19	L3	ＳＤ01	土師器	高杯	22.0	残存3.0	－	粗	良	10YR8/3浅黄橙色	5%未満	
20	L4	Ⅲ層	土師器	高杯	21.6	残存5.0	－	密	良	10YR7/4にぶい黄橙色	5%	
21	K3	ＳＤ01	弥生土器	高杯	－	残存4.9	－	やや粗	良	10YR7/3にぶい黄橙色	5%	
22	L2	Ⅲ層	土師器	擬凹線器台	18.6	残存3.65	－	密	良	7.5YR6/4にぶい橙色	5%未満	口縁部擬凹線7条
23	L1	ＳＫ18	土師器	有段器台	24.5	残存2.95	－	密	良	7.5YR7/4にぶい橙色 赤彩　2.5Y5/6明赤褐色	5%未満	内外面赤彩
24	L1	ＳＤ02	弥生土器	有段器台	20.7	残存2.2	－	密	良	7.5YR8/4浅黄橙色	5%未満	内外面赤彩
25	K4	ＳＫ16	土師器	器台	15.7	残存4.1	－	粗	良	10YR8/4浅黄橙色	5%	畿内系／古墳前期
26	K1	試掘坑	土師器	小型器台	11.3	残存2.95	－	密	良	7.5YR7/4にぶい橙色	5%	透孔あり／赤褐色の混和材多量に含む
27	L1	ＳＤ02	弥生土器	装飾器台	－	残存3.45	－	粗	良	胎土　7.5YR7/3にぶい橙色 赤彩　2.5Y4/8赤褐色	10%	赤彩による装飾文／器受部長方形透孔
28	L3	ＳＤ01	土師器	高杯	頸径3.1	残存5.05	8.8	やや粗	良	10YR7/3にぶい黄橙色	30%	
29	L1	ＳＤ04	弥生土器	高杯	頸径3.8	残存3.85	－	粗	良	10YR7/3にぶい黄橙色	5%	
30	K2	Ⅲ層	土師器	高杯	頸径3.7	残存7.55	－	粗	良	7.5YR8/4浅黄橙色	20%	
32	L2	ＳＰ15	土師器	器台	頸径3.2	残存4.35	－	密	良	10YR6/3にぶい黄橙色	5%未満	頸部透孔
33	K4	Ⅲ層	土師器	器台	頸径3.0	残存4.35	－	やや粗	良	7.5YR7/4にぶい橙色	20%	透孔4方向
31	M4	Ⅲ層	土師器	高杯	頸径4.9	残存8.3	－	やや粗	良	胎土　5YR6/6橙色 赤彩　10R5/8	20%	外面赤彩
34	L4	Ⅲ層	土師器	器台	頸径4.55	残存8.55	11.35	粗	良	7.5YR7/4にぶい橙色	50%	頸部透孔４方
35	L1	ＳＫ09	土師器	鉢	14.6	残存5.7	－	粗	良	7.5YR6/6橙色	5%	
36	M4	Ⅲ層	土師器	鉢	14.7	3.0	7.5	密	良	5YR6/6橙色	70%	
37	M3	ＳＫ11	土師器	鉢	16.5	残存5.2	－	粗	良	外面　10YR5/2灰黄褐色 内面　10YR6/4にぶい黄橙色	5%	
38	M5	Ⅲ層	土師器	鉢	15.7	残存6.65	－	粗	良	5Y6/8橙色	15%	白色細砂・赤褐色混和材非常に多い
39	L1	ＳＤ07	土師器	鉢	15.4	残存6.2	－	粗	良	外面　7.5YR7/6橙色 内面　5YR5/6明赤褐色	10%	
40	M3	Ⅲ層	土師器	有鈕蓋	－	残存1.89	7.55	密	良	2.5Y7/2灰黄色	65%	
41	K1	Ⅲ層	土師器	有鈕蓋	ツマミ径2.4	残存1.8	－	粗	良	7.5YR7/6橙色	10%	
42	L1	Ⅲ層	土師器	ミニチュア	6.1	4.3	3.4	密	良	7.5YR6/4にぶい橙色	80%	
43	J2	Ⅲ層	土師器	ミニチュア	5.6	2.8	2.9	密	良	5YR7/6橙色～ 10YR8/3浅黄橙色	90%	
44	M4	Ⅲ層	土師器	杯	12.0	5.0	2.6	粗	良	5YR7/8橙色	50%	漆町11～12併行／5～6世紀
45	L2	Ⅲ層	土師器	椀	－	残存3.65	7.5	密	良			
46	L4	Ⅲ層	土師器	杯	12.6	2.45	9.0	密	良			
49	L1	ＳＰ14	中世土師器？	皿	11.8	残存2.0	－	粗	良			
47	L3	ＳＤ01	土師器	皿	－	残存4.05	－	密	良			
48	K4	ＳＤ03	中世土師器	皿	8.2	4.5	2	やや粗	良			
50	K3	ＳＤ01	土製品	土錘	最大径4.1	長3.8	孔径1.3	密	良			
51	K2	Ⅲ層	土製品	土製支脚	4.4	残存5.4	－	粗	良			
52	M3	Ⅲ層	須恵器	杯Ｇ蓋	－	残存1.7	－	やや密	やや良			
53	J3	ＳＤ01	須恵器	杯Ｂ蓋	15.7	残存1.9	－	やや密	不良			
54	J3	ＳＤ06	須恵器	杯身	12.3	残存2.85	－	密	良			
55	L2	Ⅲ層	須恵器	杯Ａ	12.6	残存3.2	9.4	密	良			
56	M2	ＳＰ22	須恵器	杯Ｂ身	13.2	3.9	高台9.3	密	良			
57	J2	ＳＤ01	須恵器	杯Ｂ身	－	残存2.55	高台9.1	やや密	やや良			
58	L3J3	ＳＤ01	須恵器	杯Ｂ身	－	残存1.95	高台8.7	密	良			
59	K2	Ⅲ層	須恵器	杯Ｂ身	－	残存1.9	高台8.9	やや密	やや良			
60	M3	Ⅲ層	須恵器	杯Ｂ身	－	残存1.9	高台6.6	密	不良	5PB4/1暗青灰色 高台部　N7/0灰白色	40%	
61	J1	試掘坑	須恵器	短頸壺	9.4	残存7.25	－	密	良			肩部外面に凹線1条／8世紀／ 表面に自然釉
62	L2	Ⅲ層	須恵器	横瓶	11.4	残存13.9	－	密	良	外面　5PB5/1青灰色 内面　N4/0灰色	5%未満	体部径（復元）22.8cm／口縁端部に凹線 ／8世紀
63	L2	Ⅲ層	須恵器	大甕	－	－	－	密	良			
64	L2	Ⅲ層	須恵器	大甕	－	残存6.6	－	密	良			
65	J2	ＳＫ19	須恵器	大甕	(約60)	残存1.5	－	緻密	良好			外面に波状櫛描文／8世紀～9世紀／ 自然釉
66	M3	ＳＤ01	珠洲焼	擂鉢	22	残存5.3	－	やや密	良好			
67	J2	ＳＤ01	珠洲焼	擂鉢	31.1	残存4.5	－	やや密	不良			
68	M3	ＳＤ01	珠洲焼	鉢	34.7	残存7.3	－	密	良			
69	M1	Ⅲ層	珠洲焼	擂鉢	－	－	－	密	良			
70	K2	ＳＤ01	珠洲焼	擂鉢	－	－	－	やや密	やや良			
71	M3	ＳＤ01	珠洲焼	擂鉢	－	残存6.5	19.2	やや密	やや良			
72	K3	ＳＰ37	珠洲焼	装飾壺	－	－	－	密	良			
73	M3	Ⅲ層	珠洲焼	甕	－	残存2.55	16.6	やや密	不良			
74	L3	ＳＫ20	珠洲焼	甕	－	－	－	密	良			
75	M3	Ⅲ層	白磁	椀	－	－	－	密	良	胎土　N8/0灰白色 釉調　2.5GY7/1明オリーブ灰色	5%	

第３表　遺物観察表

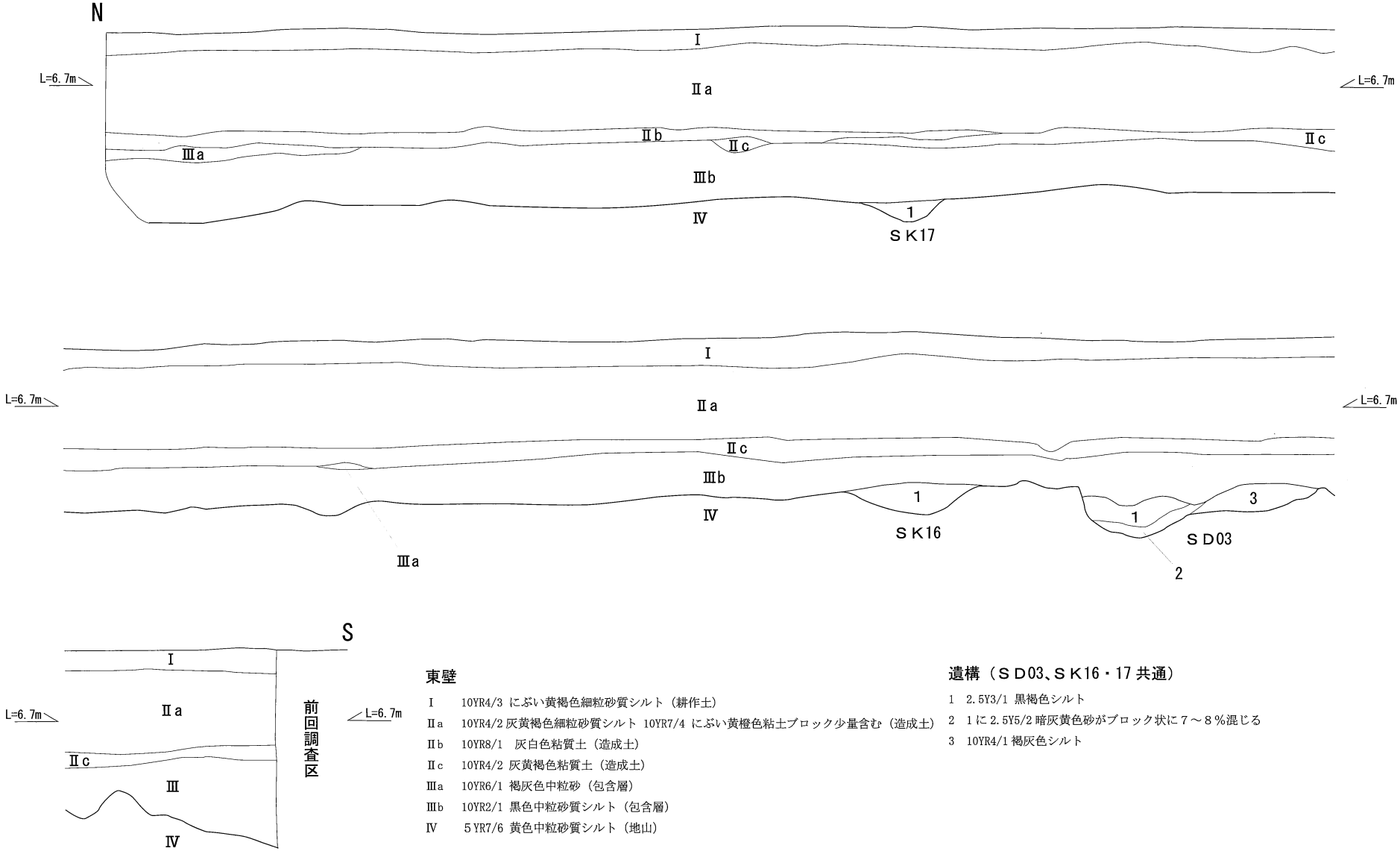


第５図　調査区（ＫＲＫＥ－2011, 2012）合成図（Ｓ＝１／250）　平面直角座標系第Ⅶ系　（　）で表している座標値は日本測地系
①～④は第２表参照





第６図　調査区全体図（Ｓ＝１／150）　平面直角座標系第Ⅶ系　（　）で表している座標値は日本測地系
遺物出土状況図　１（Ｓ＝１／40）　２・３（Ｓ＝1／10）



東壁

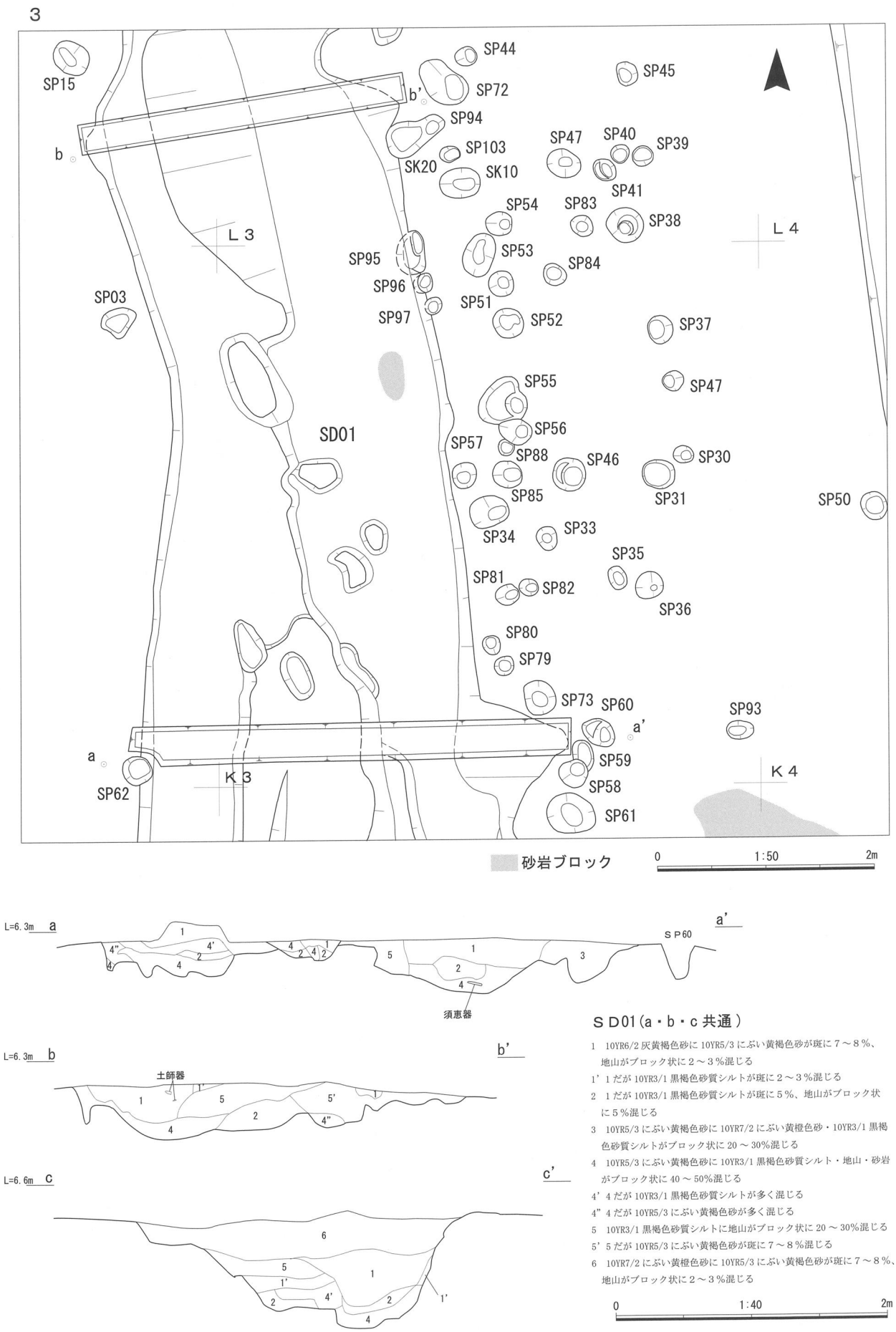
Ⅰ	10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂質シルト（耕作土）
Ⅱa	10YR4/2 灰黄褐色細粒砂質シルト 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土ブロック少量含む（造成土）
Ⅱb	10YR8/1　灰白色粘質土（造成土）
Ⅱc	10YR4/2 灰黄褐色粘質土（造成土）
Ⅲa	10YR6/1 褐灰色中粒砂（包含層）
Ⅲb	10YR2/1 黒色中粒砂質シルト（包含層）
Ⅳ	5YR7/6 黄色中粒砂質シルト（地山）

遺構（ＳＤ03、ＳＫ16・17 共通）

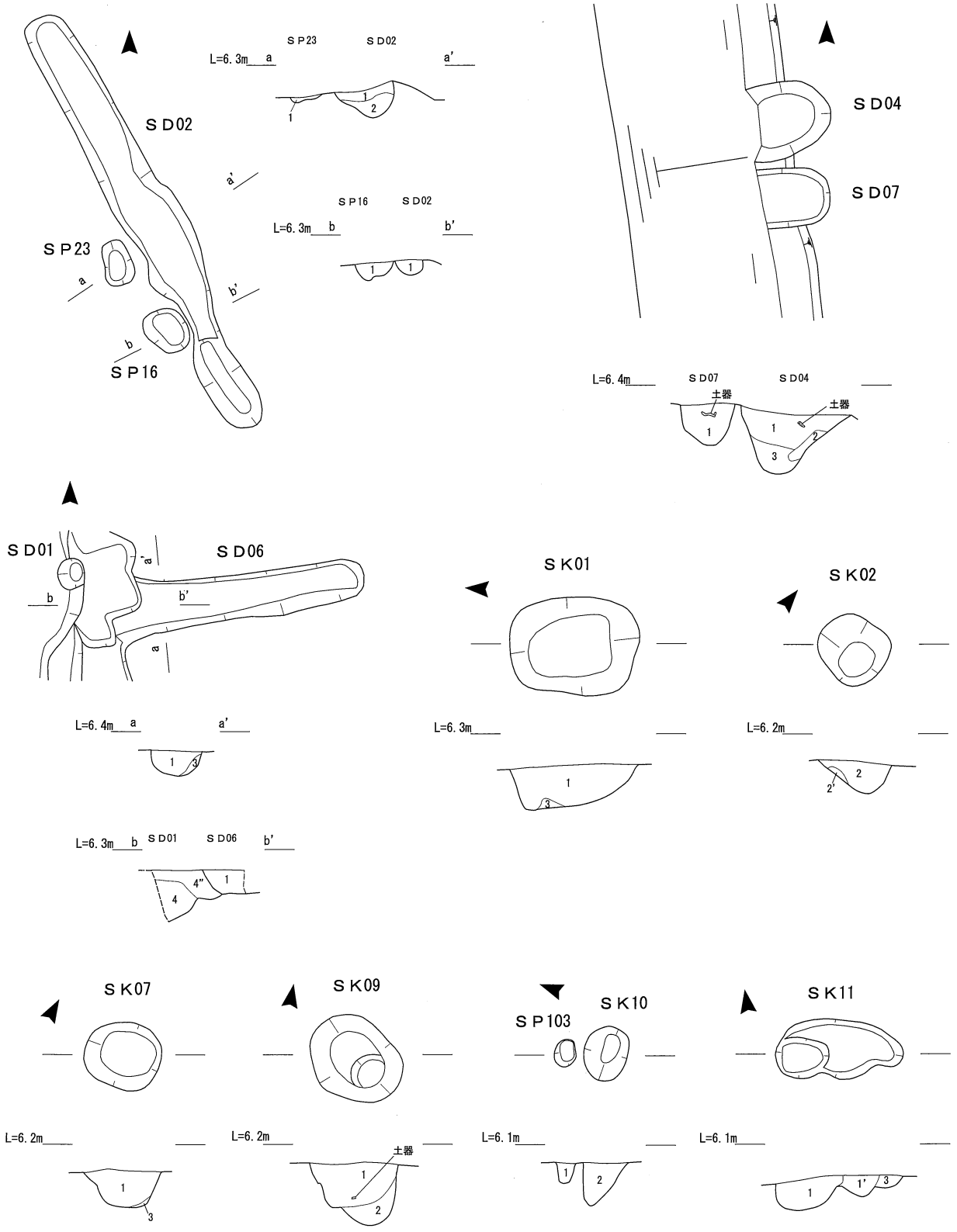
1　2.5Y3/1 黒褐色シルト
2　1に 2.5Y5/2 暗灰黄色砂がブロック状に７～８％混じる
3　10YR4/1 褐灰色シルト

第７図　調査区壁面土層断面図（Ｓ＝１／40）

0　1:40　2m



第8図　遺構実測図（1）調査区部分図（全体図3）（S＝1／50）　SD01 土層断面図（S＝1／40）



ＳＤ02・ＳＫ・ＳＰ共通

1　2.5Y3/1 黒褐色シルト
1'　1に3がブロック状に混じる
2　10YR4/1 褐灰色シルト
2'　2に3がブロック状に混じる
3　2.5Y5/2 暗灰黄砂
4　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（ＳＫ09）

ＳＤ04

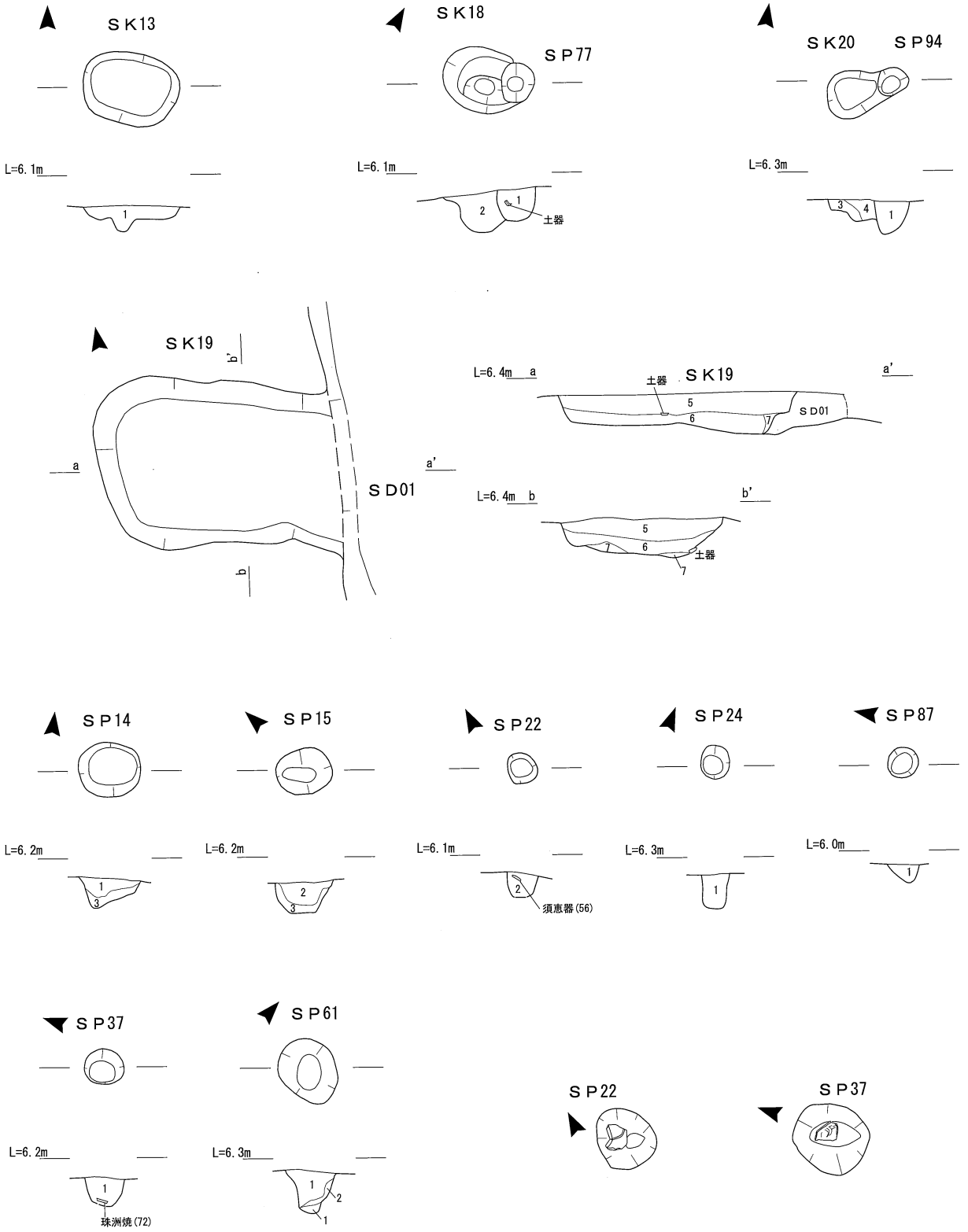
1　10YR3/2 黒褐色砂質シルトに 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、10YR4/6 褐色粘土質シルトがブロック状に 10%混じる（炭化物粒 1%混）
2　10YR3/2 黒褐色砂
3　10YR3/1 黒褐色シルト（炭化物粒 1%混）

ＳＤ06・07 共通

1　2.5Y3/1 黒褐色シルト
2　2.5Y5/2 暗灰黄砂
3・4・4"　ＳＤ01 と共通

0　1:40　2m

第９図　遺構実測図（１）ＳＤ02（ＳＰ16・23）・04・06・07、ＳＫ01・02・07・09・10・11・13・18（ＳＰ77）

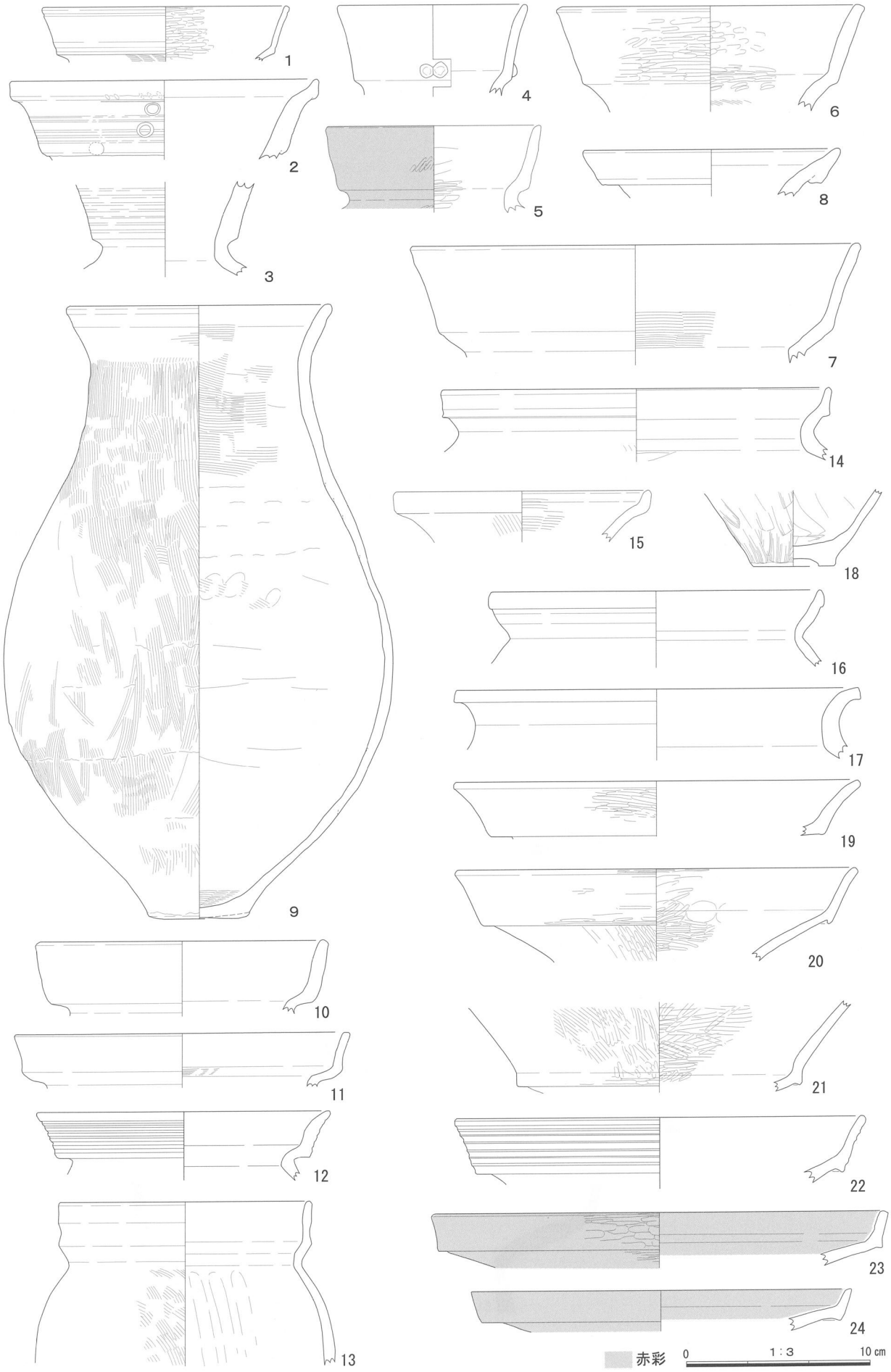


ＳＰ・ＳＫ共通

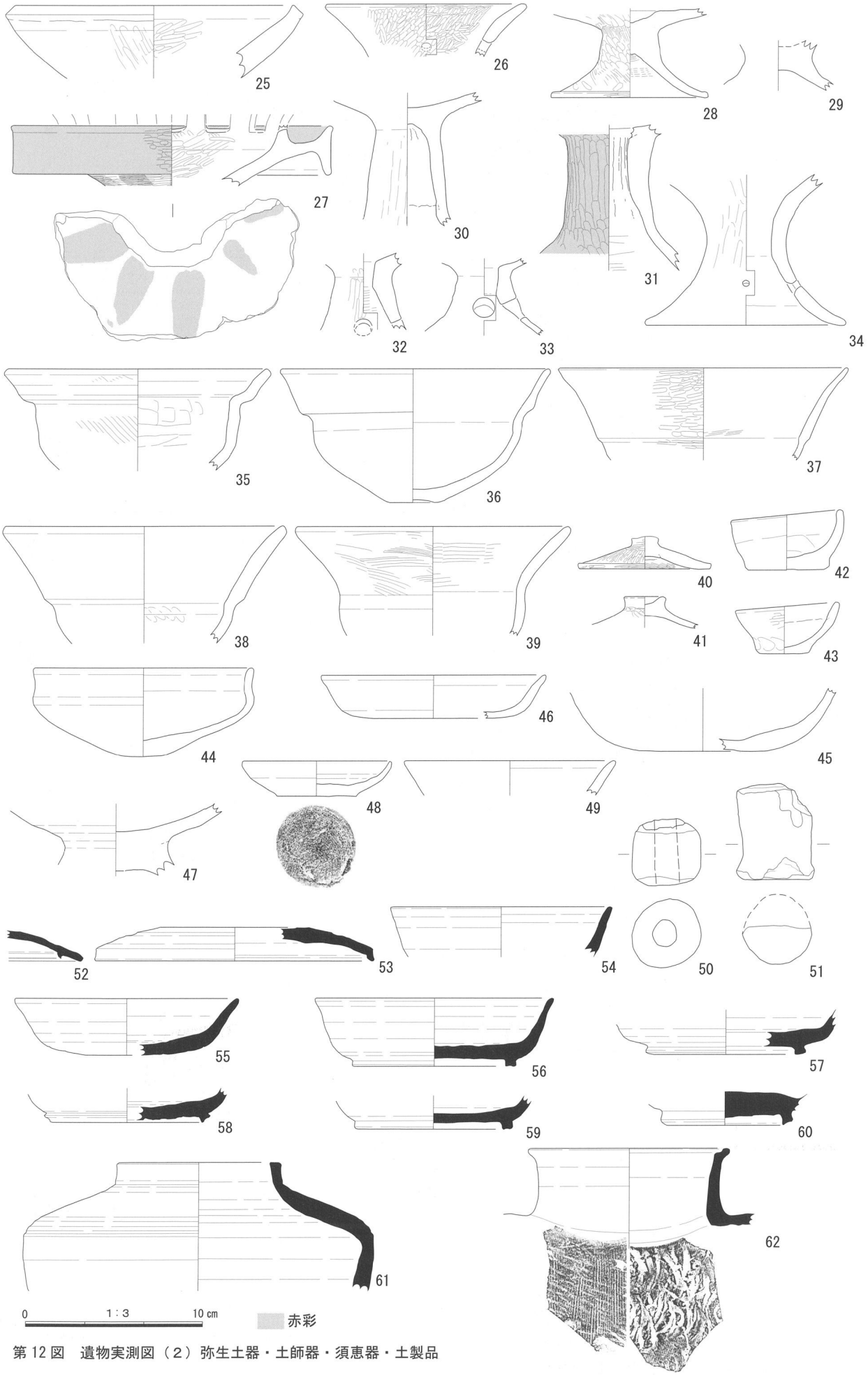
1　2.5Y3/1 黒褐色シルト
1'　1に3がブロック状に混じる
2　10YR4/1 褐灰色シルト
2'　2に3がブロック状に混じる
3　2.5Y5/2 暗灰黄砂
4　10YR3/1 黒褐色砂質シルト（ＳＫ20）
5～7（ＳＫ19）
5　2.5Y3/1 黒褐色シルトに地山がブロック状に混じる
6　2.5Y4/2 暗灰黄色シルトに地山がブロック状に混じる
7　2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土

0　1:20（出土状況）　1m
0　1:40（平面・断面）　2m

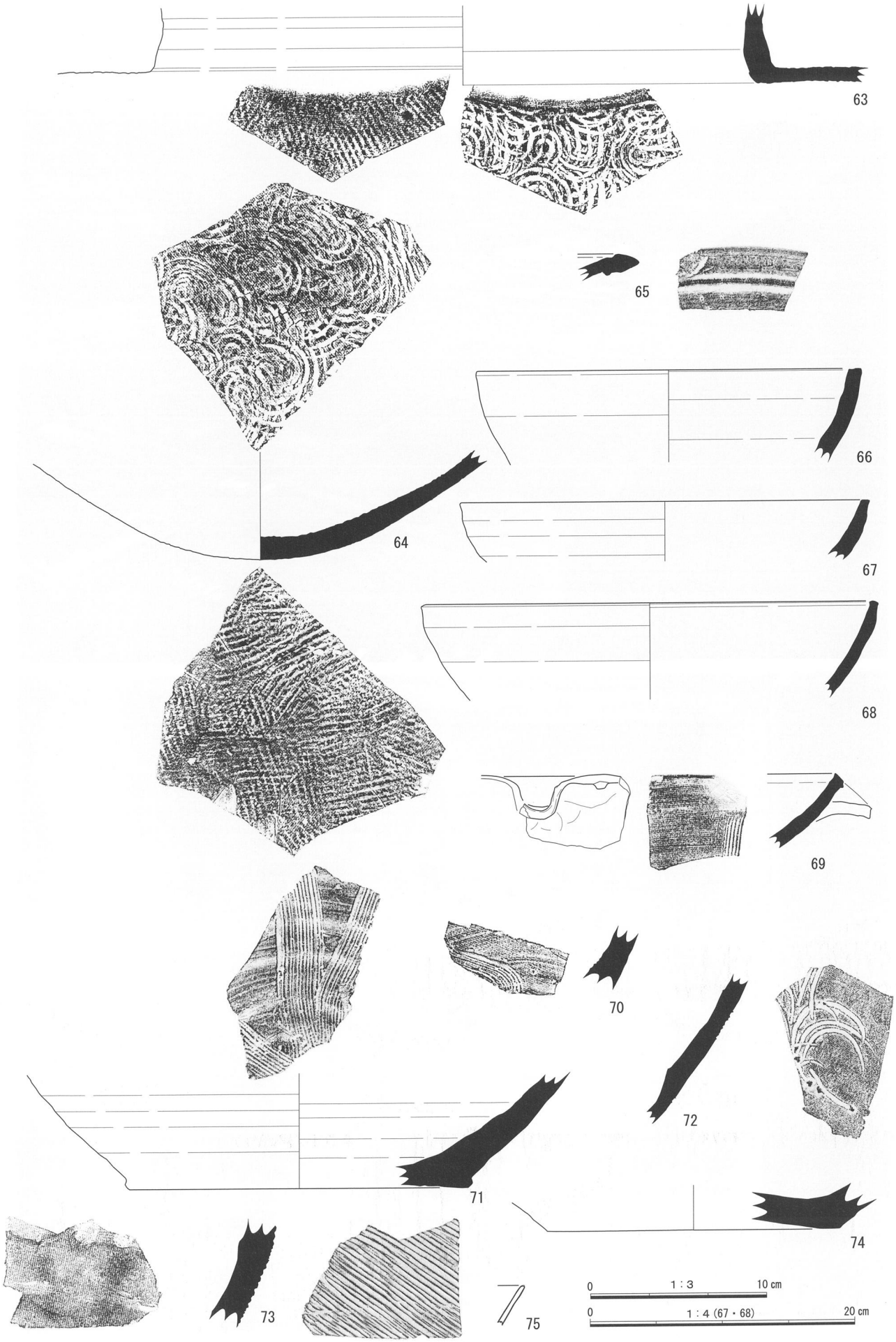
第10図　遺構実測図（２）　ＳＫ13・18・19・20（ＳＰ94）、ＳＰ14・15・22・24・37・61・87
遺物出土状況　ＳＰ22　ＳＰ37



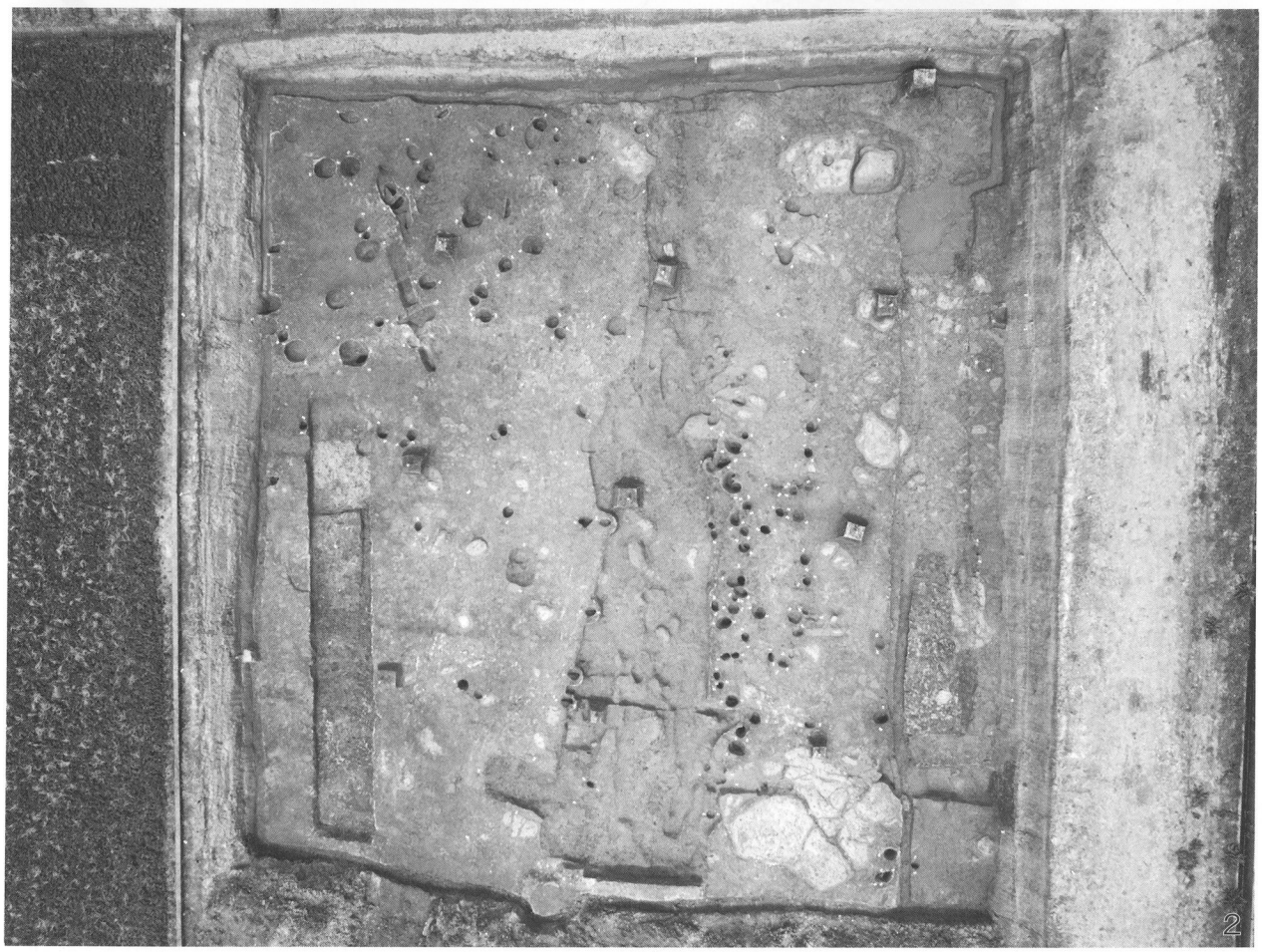
第 11 図　遺物実測図（1）弥生土器・土師器



第 12 図　遺物実測図（２）弥生土器・土師器・須恵器・土製品

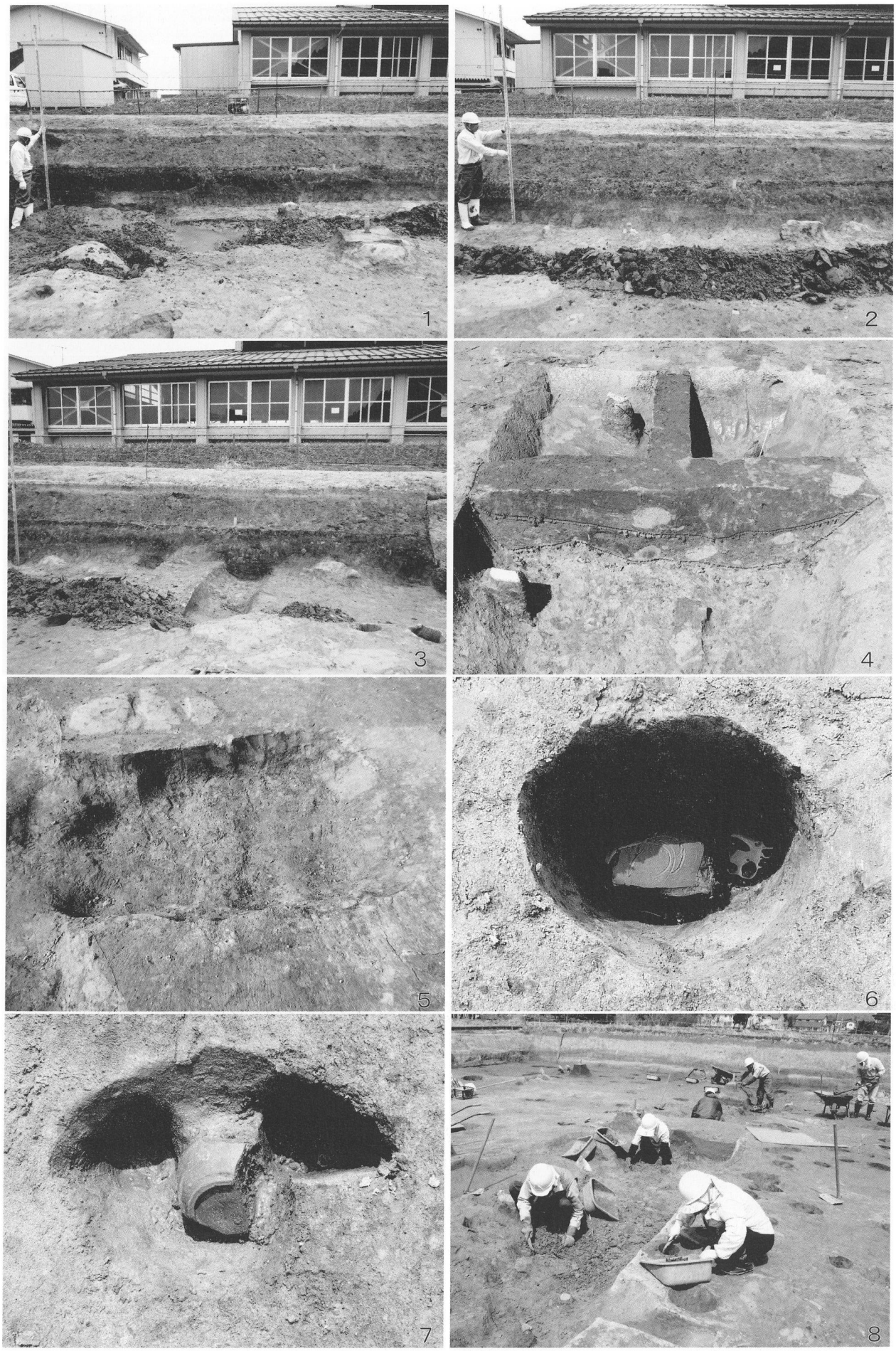


第 13 図　遺物実測図（３）須恵器・珠洲焼・白磁

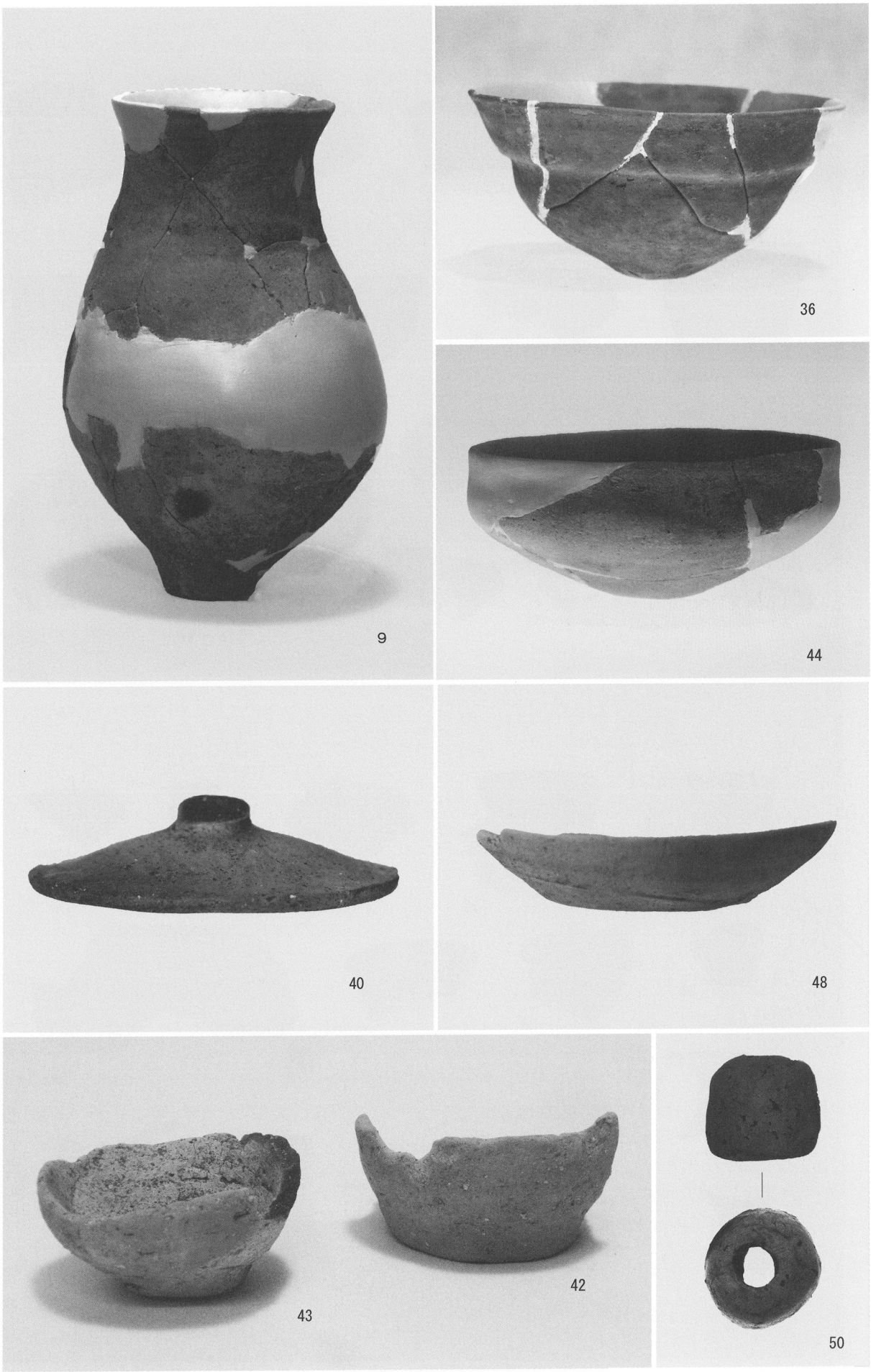


図版1　1．調査区遠景（東から）　2．調査区全景(垂直)

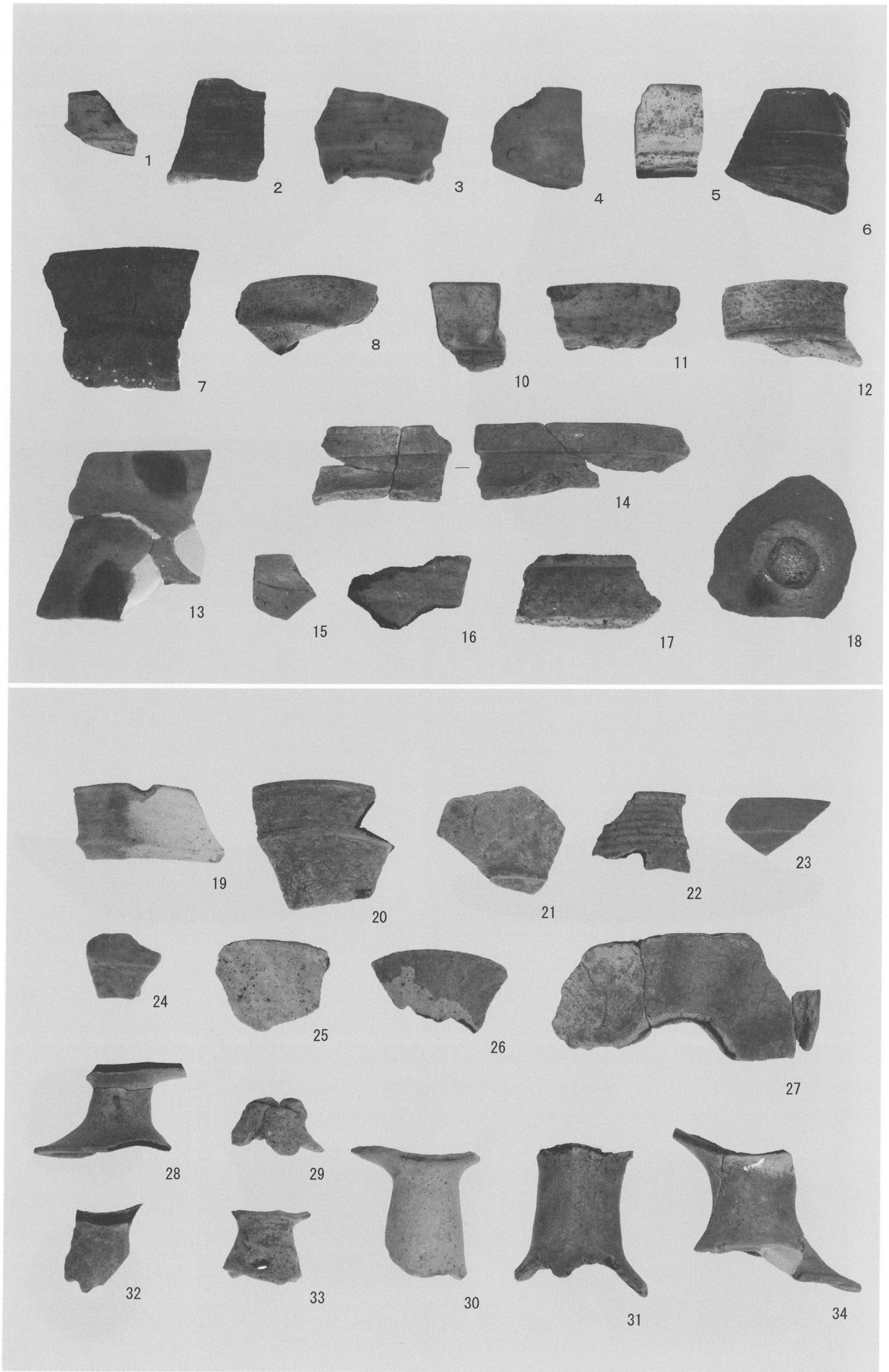
図版２　１．遺構検出状況（南から）　２．ＳＤ01 - C土層断面(南から)
３～５．包含層遺物出土状況（３．東から ４．西から ５．東から）



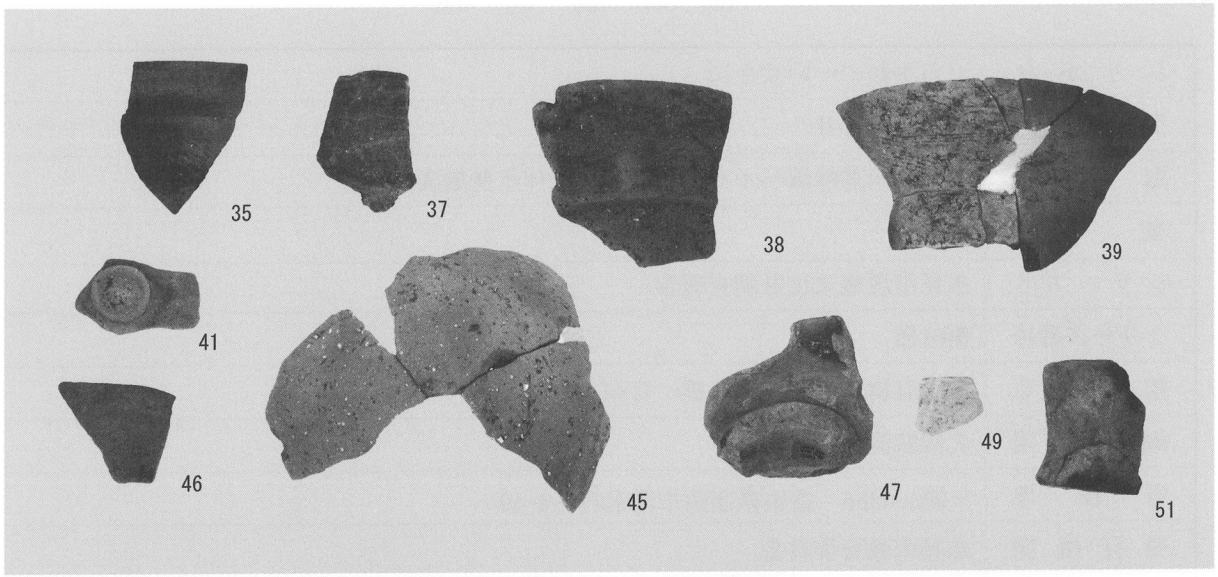
図版３　１～３．調査区東壁土層断面（北端→南端）　４．ＳＫ19断面（東から）
５．ＳＫ19完掘（北から）　６．ＳＰ37遺物出土状況（西から）
７．ＳＰ22遺物出土状況（北から）　８．作業風景（ＳＤ01遺構掘削）

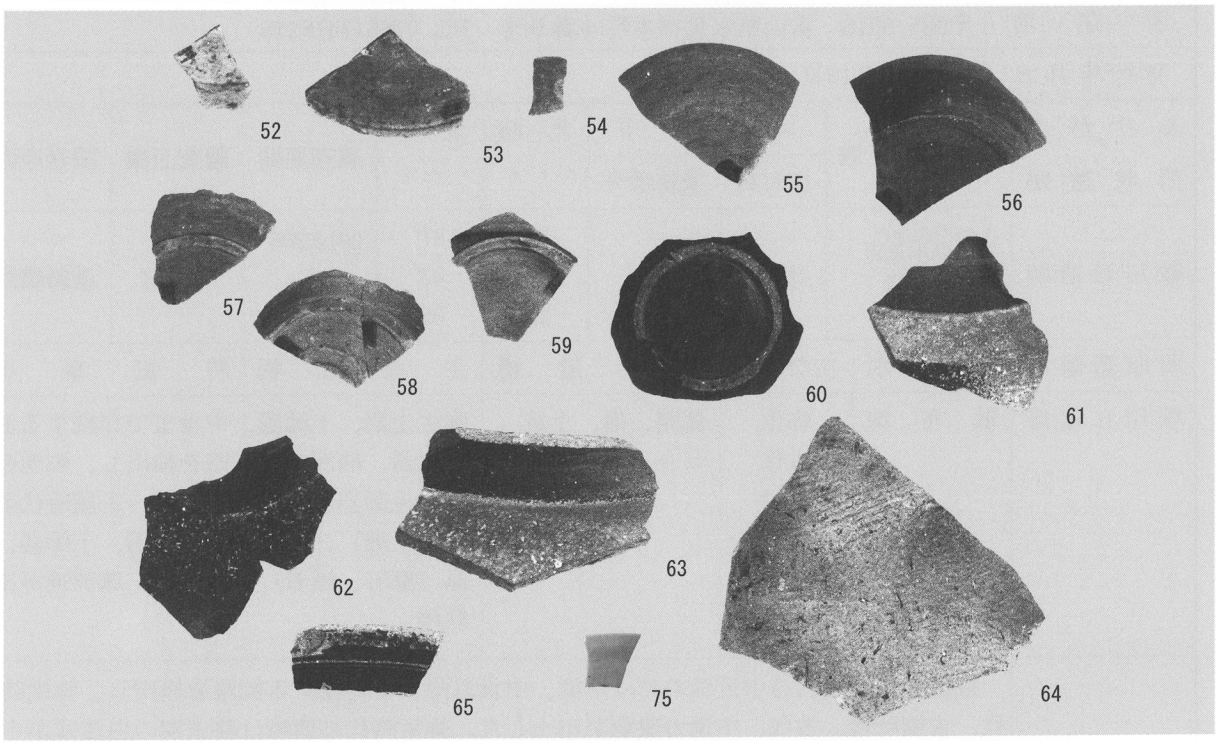


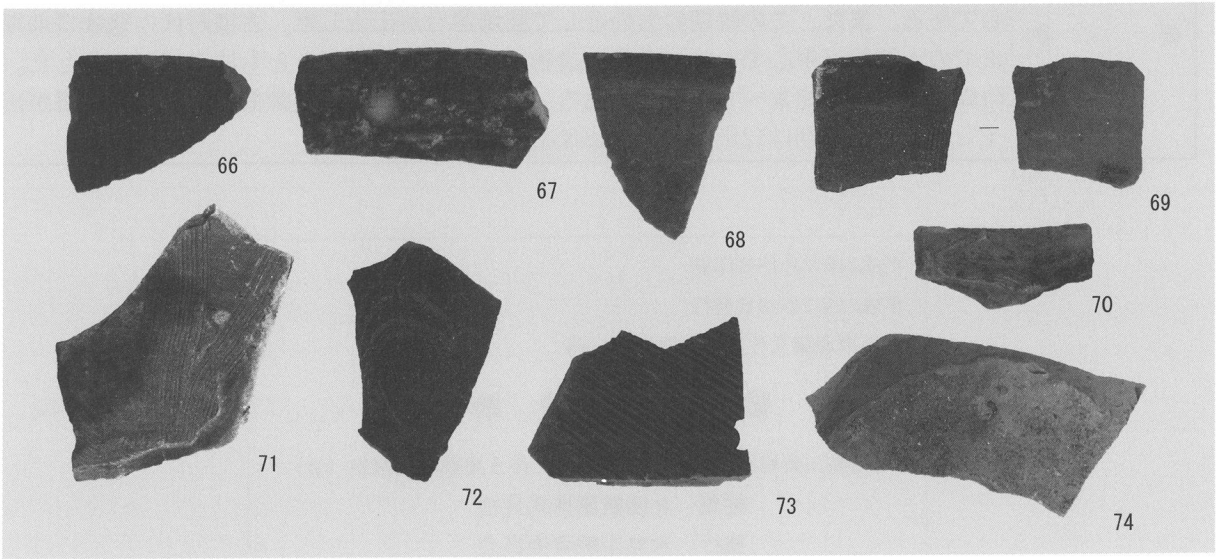
図版４　遺物写真１


1
2
3
4
5
6
7
8
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
32
33
30
31
34

図版５　遺物写真２


35
37
38
39
41
46
45
47
49
51


52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
75


66
67
68
69
70
71
72
73
74

図版６　遺物写真３

報　告　書　抄　録

ふりがな	くらかわいーいせきに
書名	鞍川Ｅ遺跡Ⅱ
副書名	市道鞍川霊峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	2
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第61冊
編著者名	廣瀬直樹、朝田　要、橋　日奈子
編集機関	北陸航測株式会社
所在地	〒933-0866　富山県高岡市清水町3-4-40
発行機関	氷見市教育委員会
所在地	〒935-0016　富山県氷見市本町４番９号　TEL 0766(74)8215
発行年月日	2012年7月18日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くらかわいーいせき 鞍川Ｅ遺跡	とやまけんひみし 富山県氷見市 くらかわ 鞍川	16205	394	36° 47′ 26″	137° 03′ 02″	20120305 ～ 20120420	361㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鞍川Ｅ遺跡	散布地	弥生 古代 中世	流路、溝、土坑 ピット	弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、中世土師器、土製品（土錘）、石製品（磨石、砥石）、鉄滓	中世まで存続する流路を検出し、弥生時代終末～古墳時代前期の土器、土師器、須恵器、珠洲焼が出土した。

要約	規則性がみられる中近世のピット群、中世以降まで存続する流路を検出し、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺物が出土した。弥生時代の遺物は終末期の白江式が中心である。また、この時期のものとして装飾器台が出土した。古墳時代の遺物は前期までの土師器が中心である。古代の遺物は須恵器・土師器とともに土錘が出土した。時期は主に８世紀末～９世紀代である。中世の遺物は中世土師器・珠洲焼・白磁が出土しており、時期は12世紀後半～13世紀前半を主体とする。

平成24年7月18日印刷
平成24年7月20日発行
氷見市埋蔵文化財調査報告第61冊

鞍　川　Ｅ　遺　跡　Ⅱ

市道鞍川霊峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（２）
編集　北陸航測株式会社
発行　氷見市教育委員会
印刷　株式会社トーザワ